

わがこゝろ千里の道をいつこえて軍の場をゆめにみつらん

(明治三十七年御製「夢」)

軍人すゝむ山路をまのあたり見しは假寢のゆめにぞありける

(明治三十七年御製「夢」)

夢さめてまづこそ思へ軍人むかひしかたのたよりいかにと

(明治三十七年御製「をりにふれて」)

など、御夢にさへ見させ給うたのである。そして戦時は、夏も冬も同

じ軍服をお召になつたまゝ、夜更くるまでも御寢所に入り給はず、一

旦御寢遊ばされた後も、戦報あらば何時にても起せよ、と仰せられた。

戦にはのおとづれいかにぞとねやにも入らずまちにこそま

て (明治三十七年御製「折にふれて」)

はからずも夜をふかしけりくのため命をすてし人をかぞへ

(明治三十七年御製「折にふれて」)

明治三十七年八月十日、旅順口外の海戦に際し、伏見宮博恭王殿下

は海軍少佐として御奮戦中、敵弾のため御負傷遊ばされ、御軍服は八ツ裂きになつた。この御軍服を伊東軍令部長が天覽に供しながら殿下の御武勇を言上申上げたところ、大帝は眉一つ御動し給はず、ただ一言、

「ほかのものはどうであつたか？」

と御下問になつたといふ。大帝には、一皇族の御戦功よりも、先づ多くの兵士が御氣懸りていらせられたのである。かくも臣下をのみ御慈しみ給うたのである。

ちかゝらばわが庭ざくら北支那のたむろに折りてやらましもの

(明治三十八年御製「花下言志」)

ひむがしの都の空も春寒しさえかへるらむ北支那の山

(明治三十八年御製「春遠情」)

戦のには立つ身をいかにぞと思へば花もみるこゝちせず

(明治三十七年御製「見花」)

北支那 満洲の地を指しての御言葉
ひむがし 東の古語すなはち東京
さえかへる 春になつて却つて餘寒の烈しきをいふ

萬骨
たくさんの屍

かくの如く兵士の上を御懸念遊ばされたのであるから、戦勝の後、凱旋して来る勇ましい将卒の姿を御覽遊ばさるゝにつけても、その功成り歸る一將の下に斃れた萬骨のことは夢忘れさせ給はず、外國にかばねさらしゝますらをの魂も都にけふかへるらむ

(明治三十八年御製「凱旋の時」)

と御詠みになつた。これを聞いては在天の靈も天かけりして大御心に感泣したであらう。

大帝はこれ等戦死者の靈を日々慰め給ふために、宮中に振天府(日清戦争)、懷遠府(北清事變)、建安府(日露戦争)を建てさせられ、こゝにその當時の記念物を御手づから飾らせ給うたばかりでなく、戦死した將校の寫眞を悉く掲げて日夜これを御覽ぜられた。そして深き御感の餘り、左の様な御製を詠み出で給うた。

(明治三十七年御製「寫眞」)

末とほく
遠い將來まで

うせにし
亡くなつた

想像のほかであ
る
想像出来ない

國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

(明治三十九年御製「をりにふれて」)

國のため命をすてしますらをの姿をつねにかゝげてぞみる

(明治三十九年御製「寫眞」)

かくの如くであるから、大帝が靖國神社の大祭を重く見させ給うたことは想像のほかであつて、國の爲いのちをすてしますらをのたま祭るべき時ちかづきぬ

(明治三十九年御製「をりにふれて」)

の御製にも見られる通り、その日を待ち遠しくお思ひになつたのである。春秋兩度の大祭には必ず勅使が立つた。また、時としては行幸しましたして御親ら玉串を捧げ給うた。さういふ時には、殊のほか御感深くあらせられた様拜せられる。

もみぢばの赤き心を靖國の神のみたまもめでゝみるらむ

(明治四十二年御製「社頭紅葉」)

睥睨 にらみまはす
 大村益次郎は長
 州の時の總指揮
 撃の時の訓練が國
 となる。我が國
 に洋式調練のの
 基礎を築いたの
 は彼である
 いづく
 尊崇して奉祀
 する
 明治三十八年五
 月三日午後七時
 靖國神社にて合
 祀の招魂式を行
 はれし際の御製
 とは

神垣になみだたむけてをがむらしかへるをまちし親もつま子
 も
 (明治三十九年御製「をりにふれて」)
 いま、靖國神社のあたりは、大帝の行幸遊ばされた當時のひなびた
 佛は殆ど止めず、石垣と石疊によつて固められた社頭には、世界一の
 鑄銅の大鳥居が聳え、かなり近代化してはゐるが、なほ大村益次郎の
 銅像(明治二十六年六月六日建立)は、依然として東京市中を睥睨して
 ゐる。そして君國に盡した忠勇の士の魂は、今も變らず國の守護と
 なつてこゝに籠つてゐる。

戦のにはにたふれしすらをの魂はいくさをなほ守るらむ
 (明治三十七年御製「をりにふれて」)

靖國のやしろにいつくかゞみこそやまと心のひかりなりけれ
 (明治三十九年御製「鏡」)

—吉江石之助監修—明治天皇御製讀本—

九 若き日の東郷元帥

—

北太平洋の中央に於て、群島で成立つ布哇國々王第七世カラカワ
 といふのは、頗る聰明な人で、明治十四年はるく我が邦に來遊して
 明治大帝に謁し奉り、大帝を盟主に仰いで、東洋諸邦の同盟を策しよ
 うとした程の傑物であつたが、同二十四年米國に客死したので、王妹
 リ、ヲカラニが位を嗣いで、第八世の國王となつた。處が幾もなく
 して内外數多の紛擾が起り、その結果同女王は、西曆千八百九十三年
 (明治二十六年)一月十七日、遂に王位を退くこととなり、米國人のド
 ルといふ市民が、假政府の大統領に選まれ、米國の保護を受けるとい
 ふ理由の許に、舊王宮であつた政廳の屋上には米國々旗を掲揚し、米
 國の軍隊によつて護衛せられることとなつた。
 當時同國には二萬五千人の我が居留民がゐたので、その保護の爲

策す はかる
 客死 旅先で死ぬ
 紛擾 みだれる

投錨
いかりをおろす、船をとめる

碇泊
船がとまつてゐる

輕舉妄動
かるはずみのことをする

斷乎として
おもひ切つて

軍艦浪速が、同國の首都ホノル、港へ急派せられた。さうして同艦の艦長は東郷大佐即ち今の元帥その人であつた。二月二十三日ホノル、港へ投錨すると同時に、東郷艦長は同乗員を集め一場の訓示を與へた。

「一同へ一言する。改めて申さずとも、諸氏は既に充分の覺悟があると思ふが、本艦が當地に碇泊してをるのは皇國領土の一部がこへ延長したと意義を同じくするものがあることを忘れてはならない。この觀念よりして我々の責任は、一層重大となるのである。随つて今後變亂等の有無に拘らず、我々の一舉一動は、直ちに御國の品性にまで、影響を及ぼすものであることを覺悟し、輕舉妄動を慎むと同時に、いよく、決行の場合には、少しも躊躇することなく、斷乎として進むべきに進み、以て皇國武人の本領を完うせねばならぬ。」

これが終ると直ぐに諸士官を艦長室に集め、事變が起つた際に取

矮軀

小さいからだ

清楚

すつきりして

落暉

夕日

水天髣髴

水と空とのさ

かひがつかぬ

様にぼんやり

してゐる

遊子

旅にある人

るべき方針、領事館並に居留民保護に關する配置、準備等を決定し、他をしてその敏速なるに驚かしめた。

この日の黄昏時、紺の背廣服に、麥藁帽を戴いた矮軀、清楚の日本紳士があり、埠頭の方より徐々と歩をキング街に移し、今し革命黨によりて占領せられをる舊王宮の邊に出たが、米國旗、翻る宮殿を仰いで感慨に堪へざるものゝ如く、去りがてに暫時佇んでゐた。折しも落暉は名残を水天髣髴の間に留めて、四邊次第に紫色に暈され、椰子の葉末に夕風音信れて、多感の遊子の涙を誘ふ、淋しくも哀れの光景中に立つ件の紳士はあまたたび歎息しつゝ、あつたが、側を過ぎようとしたり日本水兵は、彼を見ると忽ち直立不動の姿勢を取り、擧手注目の禮をなした。彼とは言ふまでもなく、東郷浪速艦長であつたのだ。

二

間も無く有名な禮砲事件といふものが起つて來た。これは他でもない假政府の大統領に對し禮砲を放つや否やの問題で、東郷艦長

拒絶
はねつける、
ことわる

嚙矢
はじまり

さらぬだに
さうでなくて
さへ

は斷乎としてこれに反對し、
 「假政府といふやうな譯の分らぬもの、大統領に禮砲を放つなど
 は以ての外だ、東郷は絶対に拒絶する。」
 かう言ひ出したが最期、骨が舍利になつても承知せぬ例の氣性だ
 から、總領事を始め領事館員等は手古摺り抜いてしまつた。これが
 元帥の布哇に於ける痛快外交の嚙矢で、その活躍振は爾後續々と展
 開し、以てハワイ王國の滅亡史に一異彩を添へたのである。
 當時ホノル、港内には米國艦隊司令長官スカレット少將が、ボ
 ストン・モヒガン・アリアンスの三艦を率ゐて碇泊してゐたので、ド
 ル假政府大統領は、一日旗艦ボストン號にスカレット司令長官を
 訪問する事になり、その旨浪速にも通知し來り、定規の禮砲發射を希
 望した。さらぬだに假政府に對して虫醋を走らしてゐた東郷艦長
 が、何條これを承引しよう。一言の下に魚膠も無く謝絶して悠々納
 まり返つてゐた。

嘖嘖
樂聲のさわや
か

炯々
光りかゞやく

豫定の當日ドル大統領は得意満面棧橋より汽艇に乗り、ハワイ
 國旗を翻してボストン號に向つた。さうして同艦に着するや、嘖嘖
 たる樂の音起り、更に辭去の際は、米艦三隻より二十一發の禮砲を放
 つたので、砲煙港内に漲り頗る盛觀を呈した。その中に於てわが浪
 速のみは、常にも増して艦内静まりかへり、艦橋上には眼光炯々たる
 東郷艦長が、雙眼鏡を手にしてノソリノソリ歩を移し、折しもその附近
 を通過する、ドル大統領の乗艇を見下して、片頬に笑を含んでゐた。
 禮砲謝絶はこの時ばかりでは無かつた。浪速が五月中旬一旦本
 邦に歸り、同年末再度渡布し翌二十七年一月十七日となるや、假政府
 では、この日を以て建設一週年の祝典を舉ぐることに決し、その外務
 大臣より在港の各國軍艦に對し、
 「滿艦飾を施したる上、正午禮砲を放ちて祝意を表されたし。」
 と、至極虫の善い希望を依頼して來た。東郷浪速艦長は例により、總領
 事の相談に耳も貸さず、

「お断りする。」

の一言に刎ねつけ、加之御丁寧にも、その旨を在泊の英米兩國軍艦に通知したから、皮肉ではないか。

やがて十七日となつた。陸上では假政府の手に依りて、祝意を表する種々の裝飾施され、色々の催物等もあつて、市中非常に賑つたが、それに引替へ港内はひっそり閑として、何一つ常と變りし事なく、わが浪速に倣うて英米の各艦も、滿艦飾は勿論一發の禮砲をも放つものなく、沈黙の裏にこの日は暮れゆき、唯浪速の艦長室に於ては東郷艦長が、或る意味の祝杯を舉げたといふことである。

—小笠原長生—

10 日章旗

日章旗はわが大日本帝國の國旗であります。諸外國の國旗にそれ／＼大切な意味が含まれてゐるやうに、日本の國旗にも深い意味

があります。私は、今、わが日章旗を色の上からと、地理の上からと祭祀といふことの上からと、國體の上からとに分けてお話致さうと思ひます。

まづ色の上からいへば全體色そのものは、ただ、赤いのが赤く、黒いのが黒いまでで、何といつて、別段意味のあるものではありません。しかし、その色を見る人には、種々の感じを起させて、それが色の意味のやうに思はれるのであります。さうしてその感じは、人々によつていくらかの相違はあるにしても大體においては一致して居ります。

わが日章旗は、白地に赤てゑがかれてあります。その白色は、至つて汚れない清淨潔白の意味を表はして、實に結構な色合であります。西洋ではこれに静とか、平和とかいふ意味を寓せて居ります。それは、軍の時の降參旗も、この色であります。これは二心のないことを表すものらしいのです。赤色は、日本も、支那も、西洋も、皆おなじ

清淨潔白
きよく正しい

赤心丹心
まごころ

意味をもたせて誠を表します。赤心丹心などいふ語も、これらの意味から出たのでせう。西洋では、また熱心といふ意味を、これにもたせて居ります。熱の極は劇しくなり、それからして、危ないといふことにもなるので、すべての警戒の標などにも、赤色が用ひられてをります。そこで、日本の國旗は、その熱心、その誠の魂であるから、「いざ破裂」といふ、曉は、ひどくあぶないものであるが、平和の白色でこれを包んであるから心配はないのです。しかし外國人の仕向によつては、いつ破裂して、彼等を驚かすかも知れませぬ。これ全く日本人のきつい氣性を表した好い標本ではありませぬか。

地理上からいへば、日本は東に位して居る、日の出る國であります。日章旗はこの意味をも表して居ります。しかも太陽が東から出て、次第にその光を西に及すやうに東の勢力を益、西に及さうとする、進取の氣性が籠つて見えます。

つぎに祭祀上の事ですが、いづれの國の國旗も、みな祭祀の意味を

欽仰
ぐたとびあふ

天壤無窮
天地と共にきはまりない

普く
すみんぐまで
もれなく

含んで居ります。祭祀といふ語がよく當つて居らぬなら、敬神といつても宜いのです。

皇祖天照大神は、また日の神と申します。その日の神の御影に象られたのは、知らず識らずの間に、神の御護があるやうな心持がして、國民の欽仰の念を強むるものと思ひます。

國體の上からいへば、わが日本は、上に萬世一系の天皇を戴いて、その天壤無窮であることは、恰も太陽が、始もなく、終もなく、また一つの缺點もなく、眞丸に輝いて居るやうなものであるから、これに優つたよい章は他に決してあるまいと信じます。

これは私一人の考であるが、つまり日本の國旗は、いかなる點からしても言ひぶんのない章と思ひます。

どうか、この國旗の精神を全國に普く及して、國民の愛國心を引き立て、日章旗の名譽を海外へまでも輝きたいと存じます。

—松波仁一郎—

一一 安宅

ゆゑしき
容易でない

時しも頃は春の初め、風まだ寒き北國路を、いたはしや義經は、兄頼朝の疑をうけ、奥州さして落ちて行く。主從僅かに十二人、辨慶を先達^{だち}に、山伏^{やまぶし}姿^{すがた}に身をやつし、日數程經て加賀國安宅^{あな}の港に着きにけり。義經「いかに辨慶、旅人等の噂^{うわさ}によれば、安宅には特に關を設けて、山伏をきびしく取調ぶる由、如何にすべきぞ。」

辨慶「これはゆゑしき御大事なり。きつとこれにて御工夫あるべし。」

人々「いやゝゝ何程の事かあらん。たゞ打破つて御通りあるべし。」

辨慶「いやゝゝ打破らんは易けれども、大事の前の小事なれば、成るべく穩^{まなま}かなる手段を取りたし。」

義經「然らば辨慶、ともかくも其の方の工夫に任せん。よろしく計ひくれよ。」

辨慶「畏^{かしこ}つて候。先づ考へ出したることは、我等かく山伏に身をやつ

笈
山伏の背に負
ふもの
げにゝ
まことに

勸進
寺院建立の寄
附のすゝめ
殊勝
けなげ
不和
仲わる

せども、包みがたきは我が君の御品格なり。畏れながら暫く強^{つよ}力に御身をやつされ、御笠深く召され、我等の笈^{かぶ}を負ひて、わざと後にさがつて御通りあれかし、さなくば忽に見出され候はん。」

義經「げにゝ、これは尤もの事なり。」

姿をやつし、主從は、やうやく關に近づきて、通らんとすれば、關の役人富樫^{とがし}左衛門、

富樫「やあく、山伏、關なるぞ。名をなのれ。」

とぞ呼ばはりける。

辨慶「承りて候。これは奈良東大寺建立^{たんとく}の爲に、北陸道^{ほくりく}を勸進^{かんとしん}する山伏にて候。」

富樫「それは殊勝^{しゆしょう}の事なれども、山伏なるからは此の關は通しがたし。」

辨慶「して、其のいはれは。」

富樫「さればなり。頼朝、義經御不和により、義經殿には山伏と姿をかへて奥州へ落ちらるゝ由、故に諸國に新關を設けて、山伏をかた

く止むるなり。一人も通しがたし。」

辨慶「承つて候。しかし似而山伏をこそ止めらるゝならぬ。まことの山伏を止めたまふ必要は候はじ。」

富樫「あらむづかし。論より證據なり。まこと東大寺建立の勸進ならば、勸進帳のあるべき筈ぞ。こゝにてそれを讀みあげられよ。某これにて聽問せん。」

辨慶「何と、勸進帳を讀めとや、心得申して候。」

もとより勸進帳のあらばこそ、笈の中よりあり合せの卷物一つ取出し、勸進帳と名づけつゝ、即智をもつて文を綴り、まことしやかに聲高々と、天も響けと讀み上げたり。富樫つくづく聞きすまし、

富樫「もはや疑は晴れて候。御通り候へ。」

辨慶「かたじけなく候。」

げにや紅は園生に植ゑてもまぎれなし。後に従ふ強力を、富樫目早く見とがめて、

即智
そのばのきて
ん

富樫「いや暫く。その強力は通しがたし。とゞまれ。」

とのゝしりぬ。すは我が君をあやしむは、一期の浮沈と仰天し、皆一同に立ち止まる。

辨慶騒がず、そらとぼけ

辨慶「やい、強力め。何とて早く通らぬぞ。」

富樫「いや、それはこなたより止めたるなり。」

辨慶「そは又何故。」

富樫「あの強力が姿、義經殿に似たるゆゑなり。」

辨慶「奇怪千萬。義經殿に似たりとや。しか言はるゝ強力めは、一生の名譽ならんが、さりとては腹立たしや。けふのうちに能登境まで行かんと思へばこそ、強力をやとひたるに、僅かの笈を重げに負ひて、人に後るればこそ、貴人かとも怪しまるれ。憎さも憎し、いでこらしめてくれん。」

金剛杖をおつ取つて、さんぐに打擲す。

打擲
うつたりなく
つたりする

これはと驚く人々を、辨慶目にて制し止め、尙も激しく打据うる。
 富樫やうやく疑念をとき、
 富樫「これはわれ等が誤なり。その強力には構ひなし。とくく」
 同御通りあれ。」
 いふに人々ほつと息、毒蛇の口を逃れし思、さらばくと立ち上り、關
 路をあとにしづくと奥州さして下りけり。

——坪内逍遙——

一一 日光より

山舒水緩
 山の勾配はゆるやか、水の流れもゆるやか

去る二十六日午前十一時、上野發の列車にて小春の田舎三十里を瞥見しつゝ、點燈頃日光に着き、翌日中禪寺へ向かひ候。その間三里、半途の清瀧までは、いはゆる山舒水緩の境にて、他の奇なく候。清瀧より足尾街道と岐れて右折し、始めて山間に分入り、馬返の山村を過ぐれば、道は高峰の間に入りて、頭上

落暉
 入日の光

の青天布よりも狭く、大谷川雷の如く脚底に吼え候。これより中禪寺湖に到るまでの一里は、錦繡の山に候。楓漆山柿、栗かば、櫻等燃えに燃えて、黄焰紅火眼もあやに候。松檜もみなどの緑のちらほら入交りたるも、一入の眺に候。巖より巖に渡す獨木橋を岩魚釣る男がびく提げて行くも、そのまま畫に候。道は山色水聲の間を通じて、一步々々仰ぎ上り候。ふと頭を上ぐれば、夕陽火の如く左岸の諸峰を炙つて、半峰以上は赫々として燃えんとするに、右岸の諸峰は落暉に背き薄紫に闇み、ありとも見えぬ山腹の炭焼小屋より、一條の白煙縷縷として立昇るなど興味饒く候。華嚴の下流と方等の下流と落合ふ邊にて、金髮碧瞳の西洋婦人が籐椅子に乗りて來るに逢ひ候。その後より、夫なるべく、立派なる西洋紳士が太き栗毛の馬に乗りて來り候。更に上るほどに、一曲の佳歌頭上に起りて、坂を曲れば、歌の主なる十

二三の小娘が炭負へる馬追ひ來るに逢ひ候。赤襟襦袢に白手拭を被り、草鞋股引手甲の姿かひくしく、馬背に一枝の紅葉を挿したるなど、晝にも歌にもしたき風流に候。方等の瀧見茶屋を過ぎては何人にも逢はず、寂しきことに候。木の間越しに光りし夕日の山は薄れ行きて、夕霧谷間よりはひ上り、日暮れかゝり候。何處ともなく響く瀧の音、わが踏む落葉の外には何もなく、秋山の黄昏身にしみて覺え候。詩など吟じつゝ、行くうちに、羊腸の坂盡き、疎林開けて、一面の明鏡白く夕闇に光り候。中禪寺湖にて候ひき。當夜は湖畔の宿に水聲を聞きて眠り、その翌日、山を下りて日光祠に賽し候。何やら滿腹の後に甘煮をふるまはれたる心地にて、勿々看過いたし候。

不具

—徳富健次郎—青蘆集—

羊腸
うねりうねつてゐる

新京
滿洲國の首府

蹄鐵
馬の足に打つた
たかなぐつ

象徴
しるし

羊群
ひつじのむれ

一三 新京

新京は馬車の都であり、俵の都であり、そして森の都でもあるのである。

あけ方の夢を破るのもカタカタの馬車の音であり、スヤスヤと眠りにさそふのも憂々の馬車の音である。

新京の道幅はひろく、そしてコンクリー道路であるがため馬車を走らせるのに、とても氣持がよく、夏の夜などは散歩するの持つてこいである。奉天の夜が、物さわがしきものであつたのにひきかへて、新京の夜は全くものしづかにいつてもくれてゆくのであつた。

奉天できいた蹄鐵の音が、武の國のいさましい、物騒がしい象徴であつたのにたいして、ここでは蹄鐵の音が平和の音とやはらかにきかれ、森の都のしづかな色彩には、ありし蒙古のラマたちが長杆を掲げて羊群を逐ひし時代のことどもを思ひ出させるのであつた。

懷古
昔をなつかし
む
折衝地
出あふ
茫々
ひろく

移民
海外にうつり
住む民
新興
あらたにおこ
る
徑路
すじみち

舊露
昔のロシア

この懷古深い蒙古の川、伊通河を中心として、長春が發達したのは僅かに百年足らずである。それが、日・支・露の三國の折衝地となつたため、茫々大海の如き草原が近代的建築を以て充たさるに至つたのであつた。

柳はみどり、プラタナスも濃きみどりを加へて、この歐羅巴に見る様な、のんびりした文化の都を緑の色で塗りつぶしてをる。

蒙古王領より山東移民の手に。それから三國の國際的折衝地へ。國際的新興都市より滿洲の首都へ。

かうした徑路をたどつて今や新興の氣分が縦横に滿ちあふれてをる。だが、ホテルの窓から更けてゆく夜の靜けさを、蹄鐵の音ともにしづかに味ふことは、だんだんできなくなるさびしさを、私は思ひつつあるのであつた。

私が、新京の停車場に立つたとき、そしてそのひろびろとした廣場に久しぶりに夜の一呼吸をしたとき、やつぱり舊露の匂ひもするな。

と思つた。

しかしながら、ヤマトホテルの玄關をおとづれて、その上を下への騒ぎになるほどと、建國の熱氣を一息ふつかけられた氣持にかはつてしまつたのであつた。

このホテルは、人口が十二三萬ある新京市街としては、すこし分にはすぎたるの感じもあつたが、しかし、日・露・支・三國折衝地として見れば、これはむしろ小さすぎるのであつた。私が、長春にいつたときは、リットン氏一行が、すでに引上げてゐたあとであつたが、彼等の御大名行列では、部屋の数がとても不足して困つたといふ。それなればこそ、國都建設委員會もこのごろ設けられて、こんどは百五十萬の人口を豫定して、現在の都市より南方へ、三里四方の大都市計畫が出来たのであつた。

そして、その計畫の内容をきいて見れば、家屋の外様式は古代の滿洲氣分をとりいれ、内部は近代洋式とし、そして市の一郭には珍しく

一郭
一とこ

賭博 かけごと
企畫 くはだて
柳の花

も賭博場さへ設くるつもりだといふ。それに競馬場、劇場など、いやしくも歡樂氣分を十二分ににじみ出ださせる粹な都とする企畫であることによつて、柳の絮のふる風流は片つ端からこはされて行くであらう。

伊通河を中心にして集まつた東蒙古の部落は、いつしか滿人の村落になつてしまひ、漢人の都會になつてしまつた長春であつた。そして今回の滿洲事件の重要な原因の一をなした萬寶山事件が、また伊通河を中心とする鮮人たちの水田經營の問題にあつたのであつた。

——滿鮮——山本實彦——

一四 農人形

水戸の常磐公園は我が國三公園の一と稱せらる。その小高き丘陵に立つ時は、仙波沼を隔てて遠く一帶の郊野を雙眸の中に收むる

行廚 べんたう
歡娛 たのしみ
鬻ぐ

雅致上品 ながもむき
稼穡 田をたがやす

ことを得べし。園は烈公德川齊昭の創設せしところ、名づけて偕樂園といふ。これ民と偕に樂しむといふ義に取れるなり。されば、常に土民の來り遊ぶに任せ、花蔭、行廚を披きて一日の歡娛を竭さしめ、月下、瓢を傾けて一夕の清遊を縦にせしめしといふ。

公園に於ては、今もなほ素燒の人形を鬻ぐ。その形は、結髮の老農が積藁の側に座して、笠をその前に置ける狀に取る。製法極めて粗なりといへども、頗る雅致に富めり。世人呼んでこれを「烈公の農人形」といふ。齊昭、居常深く心を農事に致して、屢偕樂園中の小亭に登臨して、親しく稼穡の勞苦を察しき。嘗て銅を以て農人形を鑄せしめ、常にこれを座右に置けり。その食膳に向ふや、必ずまづ初穂の意を以て一箸の飯粒をこれに供へ、然る後に食するを例とせり。

或時、齊昭は、

朝な／＼飯食ふごとに忘れじな恵まぬ民に恵まるゝ身を

といふ一首の和歌を侍臣に與へて謂へらく、「古より、賢君は民を見

勸農
農業をすすめ
る

菟裘
魯の公の隠居
した地名より
隠居の意に用
ふ

ることなほ慈母の赤子に於けるが如し。』といへり。されど、我は少しくこれに異なりて、百姓をば我が乳母なりと思ふなり。我は百姓に向ひて何等の憐みをも施さざれども、百姓は我がために命を繋ぐべきものを與ふ。その恩や乳母と何の擇ぶところかあらん。」と。爾來、侍臣等はこの農人形を「お百姓」と呼ぶに至れりとぞ。今鬻ぐところの農人形はこれを模造したるものなり。古人の意を勸農に用ひしこと、眞に懇切なりといふべし。
齊昭の祖先義公德川光圀も、また嘗て菟裘の地を水戸を距ること北方數里の太田郷西山といふ處に擇び、暇ある毎に農民を此處に引見して、親しく農事を談じきといふ。庵は西山莊と稱し、庭前に心字の池あり。池を隔てて谷あり山あり、春秋の觀賞兩つながら好し。名づけて櫻が谷、觀月山といふ。室は廣さ十數人を容るゝに過ぎず。殊に書院との間に全くその闕を撤したるは、貴賤の別を離れ、親しく農民と談話を交へんとする意に出でたりと聞く。齊昭の精神は多

度量
心の大きさ

添書
紹介狀

く光圀より得來りしなり。その意を農事に用ひしもまた前後相承けたりといふべし。

* * *

——田園都市——

明治天皇御製

山田もるしづが心はやすからじ

種おろすより刈りあぐるまで

一五 西郷の度量

おれが始めて西郷に會つたのは、兵庫開港延期の談判委員を仰付けられる爲に、おれが召されて京都にゆく途中の大阪の宿であつた。其の時、西郷は御留守居格であつた。轡の紋の付いた黒縮緬の羽織を着て、なか／＼立派な風采だつたよ。坂本龍馬がかつておれに「先生が屢、西郷の人物を賞せられるから、拙者も行つて會つて來るにより、添書をくれ。」といふから、早速書いてやつたが、其の後、坂本が薩摩

鑑識
見わける力

權謀
かけひき
小籌
小さなはかり
ごと

截然
はつきり

から歸つて來て言ふには、「成程西郷といふ奴は分らぬ奴だ。少しく叩けば少しく響き、大きく叩けば大きく響く。若し馬鹿なら大きな馬鹿で、利口なら大きな利口だらう。」と言つたが、坂本もなか／＼鑑識のある奴だよ。

西郷に及ぶことの出來ないのはその大眼識と大誠意とにあるのだ。おれの一言を信じて、たつた一人て江戸城に乗込む。おれだつて事に處して多少の權謀を用ひないことはないが、唯この西郷の至誠はおれをして相欺くに忍びざらしめた。この時に際して、小籌淺略を事とするのは、却つて此の人のために腸を見透されるばかりだと思つて、おれも至誠を以て事に應じたから、江戸城の受渡しも、あの通り立談の間に済んだのさ。

西郷は今言ふ通りに實に漠然たる男だつたが、大久保はこれに反して實に截然としてゐたよ。官軍が江戸城に入つてから市中の取締が甚だ面倒になつて來た。これは幕府が倒れて、新政がまだ布か

大度・洪量
大きな度量

れないから、丁度無政府の姿になつたのさ。然るに大量なる西郷は、意外にも、實に意外にも、此の難局をおれの肩に投掛けておいて行つてしまつた。「どうかよろしくおたのみ申します。後の處置は勝さんが何とかなさるだらう。」と言つて、江戸を去つてしまつた。此の漠然たる「だらう」にはおれも實に閉口した。これがもし大久保なら、「これはかく、あれはかく。」と、それ／＼談判して行くだらうに、さりとはいふは餘り漠然ではないか。併し、考へて見ると、西郷と大久保との優劣は此處にあるのだよ。西郷の天分の極めて高い所以は實に此處にあるのだよ。西郷はどうも人には分らない所があつたよ。大きな人間程そんなもので……小さい奴ならどんなにしたつて、すぐ腹の底まで見えて了ふが、大きい奴になるとさうでない。

西郷の大度・洪量に就いて、維新當時の模様をもう少し細かに言ふと、官軍が品川まで寄せて來て、今にも江戸城へ攻入らうといふ際に、西郷は、おれが出した僅か一本の手紙で、芝田町の薩摩屋敷までのそ

のそと談判に遣つて來るとは、なかなか今の人では出來ないことだ。あの時の談判は實に骨だつたよ。官軍に西郷がゐなければ、話はとても纏らなかつたらうよ。其の時分の形勢といへば、品川からは西郷などが來る、板橋からは伊地知などが來る。江戸の市中では今にも官軍が乗込むといつて、大騒ぎさ。併し、おれは外の官軍には頓着せず、唯西郷一人を眼に置いた。そこで、今話した通り、極短い手紙を一通遣つて、「雙方何處にか出會ひたる上、談判いたしたい。」との旨を申し送り、又「其の場所は、即ち田町の薩摩の別邸がよからう。」と、此方から選定してやつた。すると、官軍から早速承知したと返事をよこして、愈、何日の何時に薩摩屋敷で談判を開くことになつた。當日、おれは羽織袴で馬に騎つて、從者を一人連れたばかりで薩摩屋敷へ出掛けた。先づ一室へ案内せられて、暫く待つてゐると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の引つ切り下駄を穿いて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て來て、「これは實に遅刻しまして

失禮。」と挨拶しながら座敷へ通つた。其の様子は少しも一大事を前に控へたものとは思はれなかつた。

自家撞着
言ふことが合
はない
屯集
あつまる
果斷
思ひきつて事
をきめる

さて愈、談判になると、西郷は、おれの言ふことを一々信用してくれ、其の間一點の疑念も挾まなかつた。「色々むづかしい議論もありませうが、私が一身にかけてお引受します。」西郷の此の一言で、江戸百萬の生靈も、其の生命と財産とを保つことが出來、また徳川氏も其の滅亡を免れたのだ。若しこれが他人であつたら、「いや貴様の言ふことは自家撞着だ。」とか、「言行不一致だ。」とか、「澤山の兇徒があるの通り處々に屯集して居るのに、恭順の實は何處にあるか。」とか、いろいろ喧しく責立てたに違ひない。萬一さうなると、談判は忽ち破裂だ。併し、西郷はそんな野暮は言はない。其の大局を達觀して、而も果斷に富んでゐたには、おれも感心した。

この時、おれが殊に感心したのは、西郷がおれに對して幕府の重臣たるだけの敬禮を失はず、談判の時にも、始終坐を正して、手を膝の上

天空海濶
ひろくとし
てある

に載せ、少しも戦勝の威光で以て、敗軍の將を輕蔑するといふやうな風が見えなかつたことだ。

其の膽量の大きいことは所謂天空海濶で、見識ぶるなどといふことは固より少しもなかつた。あの人見寧といふ男が、若い時分に自分の處にやつて来て、「西郷に會ひたいから紹介狀を書いてくれ。」と言つたことがあつた。所が段々様子を聞いて見ると、どうも西郷を刺しに行くらしい。そこで、おれは人見の望み通り紹介狀を書いてやつたが、中には、「此の男は足下を刺す筈だが、兎も角も會つてやつてくれ。」と認めて置いた。それから、人見はぢきに薩州へ下つて、先づ桐野へ面會した。桐野も流石に眼がある。人見を見ると、其の舉動が如何にも尋常でないから、私かに彼の西郷への紹介狀を閉封して見たら、果して今の始末だ。流石に不敵の桐野も之には少しく驚いて、直様委細を西郷へ通知してやつた。所が、西郷は一向平氣なもので、「勝からの紹介狀なら會つて見よう。」といふことだ。そこ

絶倫
なまからぬ
きでてゐる

で人見は翌日西郷の屋敷を尋ねて行つて、「人見寧がお話を承りに参りました。」と言ふと、西郷は丁度玄關に横臥してゐたが、其の聲を聞くと、悠々と起直つて、「私が吉之助だが、私は天下の大勢などといふやうなむづかしいことは知らない。まあお聞きなさい、先日は私は大隅の方へ旅行した、其の途中で腹がへつてたまらぬから、十六文で芋を買つて喰つたが、たかが十六文で腹を養ふやうな吉之助に、天下の形勢などが分る筈がないではないか。」と言つて大口を開けて笑つた。所が血氣の人見も此の出し抜けの話に氣を吞まれて、殺すどころの段ではなく、挨拶もろく／＼得せず歸つて来て、「西郷さんは實に豪傑だ。」と感服して話したことがあつた。知識の點に於ては外國の事情などは却つておれが話して聞かせた位だが、其の氣膽の大きいことは此の通りに實に絶倫で議論も何もあつたものではなかつたよ。

——勝海舟—氷川清話—吉本襄撰著による——

一六 南洲遺訓

詐謀
いつはりの
かりごと

事大小となく正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふるときに臨み、作略を用ひて一旦その差支を通せば、あとは時宜次第工夫の出来る様に思へども、作略の煩きつと生じ、事必ず敗るゝものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なる様なれども、さきに行けば、成功は早きものなり。

道は天地自然のものにして、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆゑ、我を愛する心を以て人を愛するなり。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ねべし。

己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出来ぬも事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、功に伐り驕慢の生ずるも、皆自ら

愛するがためなれば、決して己を愛せぬものなり。

過を改むるには、自ら過てりと思はゞ夫にて可なり。その事をば棄てて顧みずして、直に一步踏み出づべし。過を悔ひ取繕はんとして、心を苦しむるは、譬へば茶碗を破り、その破片を合はせ見ると同然にして無用のことなり。

命もいらぬ、名もいらぬ、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。

道を行ふ者は天下舉つて毀るとも足らずとせず、天下舉つて譽むとも足れりとせず。自ら信ずること篤きがゆゑなり。

天下後世までも信仰悦服せらるゝものは、只是、一箇の誠なり。古より父の仇を討ちし人その數擧げて數へ難き中に、獨り曾我兄弟のみ、今に至るまで兒童婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤き故なり。誠ならずして譽めらるゝは、僥倖の譽なり。

五常
仁・義・禮・智・信

誠篤くば、たとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。青年が先輩の所説を聞くに當りては、先づ自ら質問を起すべし。己に疑あり、進んで長者に質さば始めてその益を受くべきなり。一家の親睦を計るには、世人は多く人倫五常の道をいふ。然れどもこれは當然の看板のみにして、今日の用に益なく、怠惰に墜ち易し。速かに手を下すには、慾を離るゝこと第一なり。一つ美味あれば一家舉つて食し、衣服を製するにも、必ず良きを長者に譲り、自己を顧みず、互に誠を盡すべし。たゞ慾の一字より親族の親しみも離るゝものなれば、その根據を絶つこと肝要なり。されば慈愛自然に離れざる様になるものなり。

——南洲遺訓——

普通學科 歷史

第一 我が建國の體制

一 我が國體

萬世一系の天皇
金甌無缺の國體

光輝ある歴史 我が大日本帝國は、古より、上に萬世一系の天皇がいまして國家を統治し、臣民を愛撫したまひ、下に忠勇なる臣民があつて、よく皇室及び國家を保護し、未だかつて一度も外國の侮りを受けたることがない。實に世界は廣く、國は多いけれども、我が國の如く、古き建國の歴史を有ち、美しい國體を保つて、歲月と共に國運の圓滿なる發達を遂げた國はその類を見ない所である。われ等は、この光輝ある國史を緝いて、更に深く我が國體の尊嚴を悟り、且つ我が國が僅々數十年にして一躍世界一等國の列に坐するに至つた國運發展

の過程を究めよう。

國體 神代の昔、伊弉諾尊、伊弉冉尊の二神が、はじめて我が大八洲國を造りたまひ、その御子、天照天照大神は、御子瓊瓊杵尊に三種の神器を賜ひ、この國土に御降しになつた。この時

葦原五千百秋之瑞穗國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就いて治らせ。行きくませ。實祚の隆えまさんこと、當に天壤と窮りなかるべし。(日本書紀)

と仰せられた。これより、神勅のまゝに萬世一系、御歴代の天皇は、三代三種の神器を御しるしとして皇位を繼承せられ、第一神武天皇が、橿原の宮に即位の大禮を擧げさせられてより、こゝに凡そ二千六百年、君臣の分は儼然として定まり、國礎長に固まつて動くことがない。帝國憲法第一條に「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と明記されてあるのは、實にこの神勅に基き、炳として日星の如き事實を條文としたものである。これ實に世界萬邦に類を見ない所である。

國體と憲法

世界無比の國體

愛民の君
忠君の民

國體の成因

さて、かゝる世界無比の國體が我が國に成立したのは、教育勅語に仰せられてゐる通り、天照大神以來、歴代の天皇が臣民を愛したまひ、臣民もまたよく皇室に忠誠を勵んだからである。外國にも愛民の君や、忠君の民がないわけではないが、外國の君臣の關係は大抵利害の上に成立してゐるから、兩者の利害が一致してゐる間はよく和合するが、一度相反すると争を生ずるに至るのである。我が國は大正天皇が即位に際して仰せられた通り、義は君臣なれども、情はなほ父子の如くて、愛民の聖旨と忠君の觀念が並び存して長に衰へることがない。こゝに美しい國體が成立したのである。

君臣の關係

かくの如く美しい君臣の關係が獨り我が國にのみ成立したのは何故であるか。曰く我が國民の血統を尋ねると、おほむね瓊瓊杵尊に従つて降つて來た神々及び歴代天皇の皇族の後であつて、古來、皇別、神別、蕃別等の差別はあるが、いつの間にか皆渾然と融和したのである。かつて上古に於て、歸化した百濟人の子孫、調伊

溫情的君臣關係
の成因

國家即ち家族

企い儼げん中古に於て、歸化した漢人の子孫坂上田村麻呂等は蕃別の出であるけれども、その忠烈の精神の盛なことは、敢て皇別神別のものに譲らなかつた一例である。かくして、我が國は、あたかも皇室を大家として戴き、天皇を大家長と仰ぎ奉る一大家族がこの國土に據つて國家を成してゐるといへよう。そこで君臣の間に自然と父子の如き溫情が生れた。諸外國には、君主が國家を統治するものも、國民が代表を選んで治めしめるものもあるが、何れも國體はしばしば變遷して建國當時の國體を保つてゐるものは稀である。然るに獨り我が國體は太古より微動だにせず、國家の中心は常に皇室を離れることなく、國運日に月に進んで今日の發展を見るに至つたのは、實に世界に類を見ない美しい限りである。

團結力の強固

國民性の特色 かくの如く、君臣の關係はなほ父子の如く、また國民相互の關係はあたかも兄弟の如く、極めて強い團結力を成してゐる。かの元寇の如き國難にも君臣相一致してよく我が國家を護り、開闢

皇室中心
皇室中心
皇室中心

自然の風土と國民性

以來、未だ一度も外國の侮りを受けたことがない。加ふるに、我が國の山川草木は景勝美觀に富み、物質も比較的豊かであつたので、國民性おのづから溫雅に育まれて、同化力に富み、巧みに外來の文化を同化した。かの上古に於て佛教の傳來以來、輸入された大陸文化は次第に消化せられて新に國風の文化を發揮するに至り、近世に於て輸入された西洋文明は直ちにこれに融合せられて今日の如き燦然たる國粹となつたのである。實に我が國の如き宏遠なる建國の歴史を有し、美しい國體を保つて、圓滿なる國運の發展を遂げたものはこれを東西に搜り、古今に索めても全くその類を見ないのである。

國粹文化

二 氏族制度

概説 一國にしてなほ一家の如き體制のうちに育つた我が國民は、古より祖先を尊び、血統を重んずる風俗があつて、血族を基幹とする團體によつて社會を組織し、國家を編制してゐた。これを氏族制度といひ、實に我が國體の成因に大關係を有するものである。

我が國風と氏族制度

氏の構成

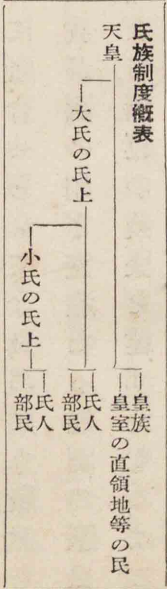
氏上

天皇の賜姓

社會組織と政治組織の一致

大臣・大連

氏と姓 氏族制度の基本は氏である。氏は各同一の祖先から出た人々の團結せるもので、一定の場所に住み、定まつた職業を有して代々子孫に傳へた。これらの氏の中には、一つの大氏(家本)とその別れの分家である若干の小氏があり、大氏及び小氏は多數の氏人(族一)と部民(隸屬)を含み、各その大氏又は小氏の氏上に隸屬してゐた。そして更に、小氏の氏上は大氏の氏上に、大氏の氏上は天皇に隸屬してゐた(別表を参照)。天皇はこれら多くの氏上に對して各、臣・連・直・首造などの名を賜はつてその尊卑を明かにした。之を姓といつて、あたかも今の爵に職業の加はつてゐるやうなものである。蘇我臣は蘇我氏の氏上でもに政務にあづかり、物部連は物部氏の氏上で軍事をつかさどつた。かくて、上古では、これら氏族内の政治は、大抵その統領の氏上によつてつかさどられ、また臣・連家から朝廷に入つて大政に與るものを大臣・大連と



いひ、天皇の大政を輔弼し奉つた。そこで、當時の社會組織はやがて政治の組織と一致し、なほ全國の諸氏族は常に皇室を仰ぎて忠勤を勵み、各氏族はおのゝその業を専らにして互におかすことなく、甚だ整然とした社會國家を組織してゐた。

祖先崇拜の大義
氏神

祭政一致 上古では、氏上は氏内を治めると共に、氏人を代表して氏の祖先たる氏神を祀ることを重要なつとめとしてゐた。全國民の大氏上であらせられる天皇は、また皇祖の祀りを行はせられて、大政をみそなはせられたので、神祇の祭は政治のうち最も重なるもので、これをつかさどる中臣・齋部兩氏などは自然と社會に重んぜられた。神武天皇は大和地方を平定されるや、直ちに皇祖を祀られて、敬神の道を明かにしたまひ、ついで崇神天皇は皇祖の御靈代たる八咫鏡を大和の笠縫(かきぬい)邑に奉安せられ、垂仁天皇は更に五十鈴川ほとりの宮に遷し奉られた。そのうつしの御鏡は之を宮中に奉安し、歴代の天皇は神器と同床共殿したまひ、大政はすべて神意に基いて行はせられ

忠孝一致

るのである。國民もまた天照大神を國家の祖神としてあがめまつり、その氏神の祭禮には、氏上はその氏人を率ゐて祭場に臨み、その祖先が君國に立てた功績を語り、嚴かに祭を行つた。そこで氏人は皆感奮して忠君愛國の精神を養ひ、おのが業にはげむと共に、祖先の名をけがさないことを誓つた。實に祖先崇拜の大義はその源を遡れば皇祖を崇め奉ることになり、歴代の天皇は皇祖の御直系であらせられるから、ひいては忠を盡すことになる。かくの如く、我が國は、古來、忠孝一致の國柄であり、天皇を現人神と仰ぎ奉ることはこの美しい國體に基く我が國民精神の世界に誇る特質である。

現人神

氏族制度の弊害

氏族制度の改廢かくて、氏族制度による社會の組織及び政治の形態は一時圓滿に行はれたが、社會の開けるにつれて漸く弊害を生ずるに至り、特に蘇我氏に至つてその極に達した。聰明なる聖德太子はその弊害を改められようとして諸般の改革を企てられたが、中道で薨じたまひ、中大兄皇子はその御志をつがれ、蘇我氏を滅ぼされて弊

制度の改革

氏族制度の廢止

害の根を斷たせられ、ついで孝德天皇を輔け奉つて、大化の改新を行ひ、且つ率先して御所有の土地人民を天皇に奉還せられたので、諸氏族もこれに倣ひ、たちまちにして全國の土地人民は天皇に歸し、天皇は直接國家統治の大權を行はせられるやうになつた。そこで、從來の氏族制度は廢れて社會の組織は一變するに至つた。その後大寶律令が完成せられて中央集權が着々行はれ、また外國文化を輸入して國運頓に進んで行つた。實に大化の改新といひ、大寶律令といひ、主として隋唐の制度を模倣したものであつたが、その骨子には我が建國の大精神は固く保たれ、忠孝節義の精神や、敬神崇祖の善美なる國風は毫も侵されることがなく、祭政一致の國是は依然として明かにされてゐた。しかし、時勢の推移に伴つて諸令制も變遷し、或はやや行はれざるに至り、特に平安時代に至つて藤原氏その權を専らにするや、政令漸く紊れるに至つたが、その形又は精神は明治維新の大改革まで遺つてゐたのである。

國粹の維持

スケレテ
フンヨウ

第二 王政復古の由來(一)——尊王論

武家政治

後鳥羽上皇の御憤り

建武中興の大業

朝廷と幕府 我が國體は、萬世一系の天皇御みづから國家統治の大權をみそなはせたまふを本質とする。然るに、平安時代の中葉より藤原氏國政輔弼の大道を紊り、武士なる階級が起つて、遂に武家の手に政權が遷り、源賴朝が幕府を鎌倉に開いてより、武家相ついて國政を執るの變態を生じた。そこで、はやくも後鳥羽上皇は王政を回復の御志があり、北條氏の專横を憤られ、遂に承久の變となつたのであつたが、御志を遂げたまふこと能はず、幕府は益々專横を極め、後には皇位繼承の御事にさへ容喙するやうになつた。ついで後醍醐天皇はその不臣の行を憤りたまひ、遂に北條氏を滅ぼして、建武中興の大業を行はせられ、後鳥羽上皇の御志を遂げられたのであつたが、未だ武家の勢力を根絶し得ない間に、足利尊氏に乗ぜられ、間もなく政權室町幕府に歸して、武家政治再び起り、以て江戸幕府に至つた。

江戸幕府と朝廷

江戸幕府は諸制度よく備はつて、中央集權の實を擧げ、封建の制度その比をみざるまでに好成績を呈した。朝廷に對しては皇居を修理し、廢れた儀式を興すなど頗る尊皇の大義を表はしたが、また公家諸法度を定めて朝廷の御事に干涉し、京都に所司代を置いて譜代大名中の俊才を之に任じ、暗に朝廷を監視せしめ、兼ねて關西地方を制せしめた。なほ藤原氏の先例に倣つて外戚となるなど大いに權勢を張つて屢々僭越の行があつた。そこで、後陽成天皇をはじめ代々の天皇その專横を御不満に思召された。しかし、一般國民は久しい武家政治になれて、將軍を知るも、上天皇の尊嚴なる國體を辨ぜず、大義名分の何たるかを知らざる者が少くなかつた。

尊王論の起因

然るに、元祿時代の前後より國學及び漢學が興隆するに伴つて尊皇復古の思想が漸く起つて來た。先づ漢學者は、儒學の王(恰も我が皇)を尊び、霸(恰も幕府)を卑しめる主義の感化を受けて國體の尊嚴なることを説き、ついで國學者は古典國史の研究をして我

公家諸法度所司代

外戚

漢學の勃興

國學の勃興

光圀と大日本史
編纂

が國體の本質を説き、天皇の至尊なることを知らしめた。かくして、
兩者相まつて、大いに國民に覺醒を與へ、社會の思潮を動かした。

尊王論の勃興 尊王論の首唱者は實に徳川光圀(水戸義公)であつた。光

圀齋と垂加神道

淺見綱齋の説
山鹿素行の説

圀は好學の聞え高く、明の遺臣朱舜水(しゆんすゐ)を請じ、且つ多くの學者を集めて大日本史を編纂して、大義名分を明かにし、吉野朝廷を正統、武家方を賊と斷定し、萬世一系を以て世界に冠絶せる國體であると説き、大いに尊皇の精神を發揚し、同時にまた湊川に碑を立てて楠公の忠烈をあらはした。これについて、山崎闇齋(あやむさし)は垂加神道(すゐかかみち)といふ神學を組織して、古道(即ち愛國)復興及び王政復古の説を唱へ、當時、幕府の輔佐役であつた保科正之も大いにこれに共鳴し、垂加神道は廣く一世を風靡し、門人中にも淺見綱齋(あやみつな)の如き傑物が出て、支那古烈士の事蹟を述べて忠義の精神を鼓舞した。闇齋と同じ頃、山鹿素行は中朝事實を著はして、我が國は世界の中華なることを説いて、國民の自覺を促した。しかし、この頃までは大抵尊王論のみを説いて、未だ武家政治

竹内式部

の非を述べる者はなかつた。

尊王論の漸盛 然るに、將軍家重の時、竹内式部(しきぶ)は京都に出て、闇齋派の神道説を講じ、尊王論の實行に着手し、公家の間に大いに尊王の思想を鼓吹した。時の桃園天皇は頗る英邁な御方であらせられた。

山縣大貳

藤井右門

しかし、式部は幕府の咎を受けて放逐せられ、その後數年にして(將軍家治時)江戸に山縣大貳(だいに)出て武家政治の非を論じた。幕府は大貳を、式部の餘黨と見做す藤井右門(みぎもん)と通じて叛を謀るものとなし、これを捕へて遂に死刑に處した。また、さきに加茂眞淵は天皇親政は我が國の治道であることを力説し、日本學(やまとがく)の興隆を圖つたが、將軍家治、家齊時代に、本居宣長は古事記傳の如き大著述を公にして、日本固有の精神を明かにし、次いで平田篤胤はかかる愛國的精神を最も強く宣揚し、更に進んで復古神道を主張して一世を震動し、その多くの門人中から後に幾多の勤王家を出した。當時、高山彦九郎は四方を巡歴して尊王の大義を説き、蒲生君平(かみぶきみへい)は山陵の荒れたのを慨き、山陵誌を著

寛政の三奇人
林子平、高山彦九郎、蒲生君平

頼山陽と日本外史

憂國運動

憂國運動

頼山陽

はし、共にその至誠純忠は人をして感奮措く能はざらしめ、頼山陽は日本外史等を著はし、明快な文章を以て巧みに尊王論を鼓舞した。かくて、尊王運動は次第に盛になり、一方、この頃、ロシア人の東進による北邊の警報頻りに傳はり、蘭學者は海防、開國論を主張して、憂國運動が擡頭し、さしも泰平なりし江戸幕府も内外共に多事多難に際し、善處するところを知らず、その失政と相俟つて遂に急轉直下、王政復古へと進展した。

第三 西洋諸國の興隆

概説 我が國が鎖國を行つて、専ら泰平の夢を貪つてゐた間に、西洋に於ては、文藝復興期以來、旭日冲天の勢を以て隆盛し、その富強を誇つたイスパニヤ、ポルトガルも漸く衰運に向ひ、十七世紀に入つて、オランダ、ついで英佛、露米の諸強國興隆して、各、燦然たる文明の光を放ち、且つ次第に植民地を目指して海外發展をなし、遂に我が國に接

概説 我が國が鎖國を行つて、専ら泰平の夢を貪つてゐた間に、西洋に於ては、文藝復興期以來、旭日冲天の勢を以て隆盛し、その富強を誇つたイスパニヤ、ポルトガルも漸く衰運に向ひ、十七世紀に入つて、オランダ、ついで英佛、露米の諸強國興隆して、各、燦然たる文明の光を放ち、且つ次第に植民地を目指して海外發展をなし、遂に我が國に接

エリザベス時代

王權神授説

「國王の權力は神の授けたものであるから議會の干渉を許さぬ」英國革命

権利の宣言

大ブリテン王國の建設

近して泰平の夢を醒ますに至つた。

イギリスの興隆

イギリスは、さきに、女王エリザベス治世五十年間は國會を開かず、民權を重んじなかつたが、その政治宜しきを得たので國民の信頼厚く、國勢年と共に伸張した。しかし、女王殂し(西曆一六〇三年)、スチュアート家のジェームス一世及びその子チャールス一世の治下となるや、王權神授説を唱へ、憲法議會を無視して暴政を行つたので、端なくも國會と衝突を起し、内亂の極、一時英傑クロンウエルの共和政治となつたが(西曆一六四九年)、クロンウエルは武斷政治を斷行して國力は伸張したが、施政があまりにも峻嚴に過ぎたので、國民はこれを嫌ひ(我が天保の改革に類す)、まもなく王政を復古して(西曆一六六〇年)、後ウイリヤム三世の代に於て、國會は王に迫つて、権利の宣言を承認せしめ、以て王權を制限して、言論の自由を確保し、イギリス憲政の基を成した。これより憲政の發達と共に國力愈々發展し、後スコットランドを併せて、大ブリテン王國と稱し、間もなくドイツのハノヴァー家からジョージ

一世を迎へて英國王とした(西曆一七一四年家繼時代)。これが今の英國王室の祖である。かくてイギリスは内、多難の機に會したが、常に植民政策を怠らず、外國特に強敵フランスと競争して、漸次その區域を擴張し、遂にその覇權を握つて、他日大英帝國發展の基礎を完成した。

フランス王權の確立

ルイ十四世
「朕は即ち國家なりと稱した」

フランスの興隆 フランスは十六世紀末に於て、ヘンリー四世が王位に即くに及び(ブルボン家の祖、秀吉死去の年)、宗教の争亂を鎮め、王權確立の基を開いたが、十七世紀に入つては、年を逐うて國內統一中央集權を達成し、明主賢相相次いで出で、殊に一代の明賢主ルイ十四世出づるに及び(我が家綱、網吉時代)、賢相また王を輔けて、内は中央集權を完成し、外は國威を發揚して、フランスは歐洲第一の富強を來し、文華燦然たるパリイは歐洲文化の中心地となり、その流行を支配した。しかし、ヴェルサイユ宮殿の造築を始め、王が豪奢と外征を好んだ結果、植民地の經營に留意する遑いとまもなく、イギリスに制せられて多望な植民地を失ひ、この時、既に財政の紊亂を招來して、後の佛國大革命の遠因を成した。

スエーデンの雄飛

ペートル大帝
「皇帝は汝等のために戦ふと思つて戦へと兵士を勵ました」
北方戦役
(西曆一七一三年)
カザリン二世

ポーランド滅亡
(約一四〇年前)

ロシアの勃興 かく、英佛二國が對峙してゐた頃、俄然北歐の天地に擡頭して來たのはスエーデンとロシアである。スエーデンは十七世紀の中頃から國力を振興して、バルト海一帯の制海權を握つてゐた。これに對し、ロシアはさきに、蒙古族の欽察汗國キプチャクを倒して、獨立した。莫斯科大公國は、漸次ロシアを一統して、イワン四世の時から(我信長時代)、早くもシベリヤ經營に着手し、その後間もなく、ミカエルロマノフ出でて(西曆一六一三年)、ロシア建設の基礎を築き、その孫ペートル大帝の即位するに及びて(西曆一六八二年、綱吉襲職の時)、スエーデンを制壓し、英佛に對抗して北歐に雄視するに至つた。時恰もルイ十四世の極盛期である。ペートル大帝の死後、數世を経て女帝カザリン二世が即位し(西曆一七六二年)、大帝の志を繼いで益、西歐の文化を輸入し、また領土の擴張に努めた。その頃、西隣のポーランド王國は、黨争などのために非常に疲弊してゐたのに乘じて、普墺兩國と謀り、三度に亘つてポーランドを分割してこれを滅した(西曆一七九五年、高山彦九郎林子平死去の年)。

フレデリック大王

（朕は即ち國家の最高奴僕であるといつた。）

オーストリア繼承戦役

（約一八〇年前）

七年戦争

（約一七〇年前）

イスパニヤポルトガルの失敗

オランダの失敗

プロシヤの興隆 北歐に瑞露が現れた頃、兩國について漸次擡頭して來たのはドイツ帝國内のプロシヤである。十七世紀の中頃、初めてプロシヤ王國建設の基が出来、その後ベルリンに都した（西曆一七〇一年綱吉時）。かくてドイツ皇帝を援けて益勢力を伸張し、間もなくフレデリック大王即位するに及んで、プロシヤは一躍して列強の間に比肩するに至つた（我が家重の家治時代）。即ち大王は國內の充實を計ると共に、偶、オーストリアの王位繼承に干渉して孤軍奮闘よく偉功を奏し、シレヂヤを併せ、更にポーランドの分割にも活躍して、國土國富頗る増進し、遂に他日ドイツの覇權を掌握する潜勢力を培養した。

英佛の植民政策 西葡兩國はその植民政策が土地侵略を目的としたので遂に失敗し、その富強も一朝の夢と消え、十七世紀に入つて一時オランダ時代を出現したが、これも唯商利を目的とし、背後に武力を備へてゐなかつたので、英佛兩國の進出と共に制壓せられて、十八世紀の劈頭からこの兩國の植民地争奪戦となつた。しかし、フラン

フランスの失敗
イギリスの勝利

スは歐洲大陸の中央に位せるため、新興プロシヤ等との争亂に腐心したに反し、イギリスは専ら力を植民地の經營に用ひ、遂にフランスを制して、大英帝國の基を達成した。

ブラッシーの戦

モガール帝國の滅亡

英佛の印度經略 英佛二國は十七世紀の初め、各、東印度會社を建て、専ら貿易に従ひ、英人はマドラス、ボンベイ、カルカッタ、佛人はボンヂシエリー、ジャンデルナゴルを根據地とし、互に勢力の擴張を圖つた。その後、次第に競争が激烈となつて、十八世紀に入つて歐洲に七年戦争が起るや、印度にも波及して遂に戦端を開いたが、英人クライヴは佛人、印度土民の聯合軍をブラッシーに破つてより（西曆一七五七年清の高宗我が家重の時）、印度に於ける英人の地歩が確立した。當時、印度はモガール帝國の衰頹期であつたので、英國はこれに乗じて次第に侵略の歩を進め、十九世紀の中頃、土民の大亂が起つたのを機會に、モガール帝國をも滅ぼした（西曆一八五七年、ルリ來朝後三年）。この時から印度はイギリス政府の直轄となり、後英國王が印度皇帝の位を兼ねることとなつた（明治九年）。

イギリスの開拓

英佛の北米経略 北米の開拓に於ても、英佛兩國は當初から相對峙した。イギリスはさきにエリザベス女王時代にヴァージニヤを開いたが、その後、英國革命前後から本國政府の壓制を嫌つて、アメリカに移住するものが多く、第十七世紀の中頃オランダから地を割かせてニューヨークなどを建て、十八世紀の初には東海岸の中部一帯を占めて、ここに十三州が出来た。フランスは十七世紀の初頃カナダの東部に植民し、ルイ十四世の時、ミシシッピ河流域を占するに至つた。かくて、ここにも英佛の植民戦が展開され、遂に十八世紀の中頃に至つて開戦するに至つたが、當時、歐洲では戰亂(七年戰役)中であつたので、イギリスはひそかにプロシヤを輔けてフランスを牽制し、主力を植民地戦に注ぎ、フランスの海上權を奪ふと共に、軍をカナダに派して佛の堅城ケベックを陥れ(西曆一七五九年)、カナダは遂にイギリスの領有となつた。

米國獨立の原因

北米に於けるイギリスの植民は、もと政治上、宗教

フランスの開拓

イギリスの成功

上の自由を得んがために移住したものが多く、一般に自主獨立の精神に富み、大抵本國の力をかりないで自ら開拓の業を進めた。然るに、本國の政策はあまりに打算的で、さきには本國の商工業を保護するために、植民地の貿易を制限し、今また諸種の租税をも課するに至つたので、植民地の人民は大いに激昂し、紛争を生じて遂に武力の衝突となつた(西曆一七五五年)。

アメリカ合衆國の建設

そこで、移住民は會議を開き、ワシントン(我が將軍、家治の時)を總督とし、西曆一七七六年七月四日、獨立を宣言し、翌年、十三州を合併してアメリカ合衆國を建て、フランクリンを歐洲諸國にやつて應援を求めた。獨立軍は初め兵器食糧に乏しく、且つ訓練も足らなかつたので敗れたが、後次第に優勢となり、フランス、イスパニヤ、オランダを始め、歐洲列國の應援を得て、遂に英本國を屈して獨立の目的を達成した(西曆一七八三年)。その後四年(我が松平定信就職の年)、アメリカ合衆國は憲法を制定し、ついで第一回國會を開いて、ワシントンの大統領に選

獨立の宣言
(約一七〇年前)

獨立成功

舉し、首府をワシントンに奠めた。

第四 西洋の近世文明 革新運動

革新思想

物質文明の進歩

カント

概説 我が鎖國前後からの西洋諸強國は各、國力を充實し、且つ互にその發展を策したが、同時に文藝復興時代から擡頭して來た文明は長足の進歩をなし、英佛獨露蘭の諸國何れも獨特の發達を遂げた。特に十八世紀に於て革新思想勃興して中古以來の舊思想を打破し、併せて舊制度を破壊せんとする運動が起り、純理を以て萬事を律せんとする傾向を生じ、また一方理化學の進歩は諸種の發明、發見を促し、最近文明の基礎を完成した。

二、三、理化學の進歩は諸國を促し、最近文明の基礎を完成した。

哲學文學 哲學は略、時を同うしてイギリスにベーコン、フランスにデカルト出で、互に一派を開いたが、十八世紀に至つて、ドイツに大哲學者カント現れ、この二派の融和を圖つて斯界に一新紀元を劃し、近世哲學の基礎を定めた。また文學では各國とも多くの文豪が輩出

したが、中にもイギリスのシエークスピア、ミルトン、フランスのコルネイユ、モリエール、ドイツのレツシング、ゲーテ、シルレルなどは何れも世界的大文豪として芳名を後世に輝した。

革新文學 なほ特に記すべきものは十八世紀に起つた革新文學である。これは一に啓蒙文學と稱し、簡明流麗な文章を以て庶民の蒙を啓き、覺醒を與へ、封建時代の弊風を打破せんとしたものである。當時フランスに於て最もその弊風が甚しかつたので、革新文學の烽火は先づこの國に勃つた。即ちヴォルテールはその先驅をなし、ついで、モンテスキュー、ルソーなど出づるに及び、盛に自由民權論を唱へて、社會上政治上に大影響を齎し、フランス大革命の一大原因をつくつた。

科學 科學は迷信の衰へるにつれて漸次進歩し、十七世紀の末頃ニュートン(英)は引力の大原則を發見したが、十八世紀に至つて各種の科學は著しき進歩をなし、多くの大家が現れ、種々の發明もなされ

自然科學の發達

ルソーの説

機械と動力の發明

た。十六・七世紀の頃、顯微鏡、望遠鏡(伊人ガリレオの發明)が發明されて、大いに科學の進歩を促し、十八世紀に至つて、避雷針(米人フランクリンの發明)、蒸氣機關(英人ワットの發明)、紡績機械(英人アークラットの發明)、種痘(英人ジェンナーの發見)等の有益な發明が行はれた。

機械工業

産業革命 この新しい機械と動力の發明とは、イギリスを中心として、急激に工業界の革命を惹起し、即ち家庭組織の手工業は工場組織の機械工業と變じ、分業と大量生産が行はれ、更に工業都市の發展、貿易の擴張を伴つて、西洋人の富力は大いに増進して、その勢力は頓とんに強大を加へた。

革命の原因

フランス革命 十八世紀に於ける歐洲各國は、共に多年の專制政治と封建の遺風との積弊に苦しみつゝあつたが、特にフランスに於ては甚だしく、ルイ十四世以來財政の困難に陥り、偶、ルイ十六世の優柔不斷と失敗は民心の離背を招いた。一方新に擡頭した革新思想、殊に自由平等を主張してアメリカ合衆國の獨立したことは、輕佻浮薄なる佛國民を刺戟して遂に暴動と化し、革命の勃發を見るに至つた。

共和政治
總裁政府

(西曆一七九九年) 普、奧等の列國はその擾亂の波及することを恐れて、これを制しようとしたが、却つて事態を悪化し、やがて暴民は王を廢して共和政治を建て(西曆一七九三年我々が松平定信時代)、暴虐非道なる革新を行つた。翌年總裁政府に變つたが、新政府に不服な者どもは亂をパリに起した。ここに一代の英傑ナポレオン、ボナパルト(二十歳)が現れて忽ちこれを鎮定して、革命の大亂は漸く終りを告げ、これよりナポレオン雄飛時代となつた。

ナポレオンの全盛

ナポレオンの活躍 フランスはその革命中、歐洲各國の同盟軍の包围を受けたが、よく戦ひ、遂に普西兩國と和した。英、奧二國は未だ敵對してゐたので、ナポレオンは奧軍を破り、且つ英國と和した。その間、ナポレオンは總裁政府を倒し、自ら執政官となつて、銳意内治に盡力し、財政の整理、産業の開發、法典の編纂など大いに政治的手腕を發揮したので、國民に敬慕せられ、遂に西曆一八〇四年(家齊の時)皇帝に選舉せられ、翌年イタリヤ王をも兼ねた。同年、多年の仇敵イギリスを

ナポレオンの末路

ブルボン王朝再興

自由主義

神聖同盟と保守主義

征せんとしてトラファルガルの海戦に破れたが、やがて、プロシヤがロシヤの援けを得て戦を開くや、忽ちその聯合軍を破り、間もなくオーストリアをも制壓して、かくて歐洲大陸の諸國は、ナポレオンの膝下に征服せられた。しかし、かくも極盛を誇つたナポレオン時代も、イギリスのみは征し得ず、且つロシヤを遠征して失敗し、ついで歐洲諸國の同盟軍に抗し得ずして退位し、エルバ島に流された(西曆一八一一年九月八日)。やがて、再びエルバ島を脱出して帝位に登つた(西曆一八一二年三月)が、同盟軍の名將英人のウェリントンとワーテルロー(白耳義國)に戦つて大敗し、遂にセントヘレナ島に流され、ルイ十八世が迎へられて佛王の位に復し、さしもの大亂も全く終局した。

反動思想 フランス革命及びナポレオン戦役は自由主義の思想を喚起したが、暫く反動時代を現出し、埃普露の神聖同盟(キリスト教の教旨とす)を中心として保守主義が擡頭して、自由主義を抑壓したが、やがてギリシヤ、ベルギーの獨立となつて自由主義の勝利となり、ついでドイツ、イタリヤの自由統一をみるに至つた。

第五 清の興起 列國のアジヤ侵略

後金の建國

清朝の起

明の滅亡

滿洲族の勃興 滿洲族は金の亡んだ後は、元(蒙古族)や明(漢族)に服屬してゐたが、明が衰運に傾いた頃漸く擡頭し、明の神宗の時、その一部の酋長ヌルハチは次第にその附近諸部落を統一し、自ら皇帝と稱し、國を建てて後金と號した(皇紀二二七六年豊臣氏滅亡の翌年)。これを清の太祖といひ、今の滿洲國執政溥儀氏の祖である。やがて、太祖は明朝朝鮮の聯合軍を破り、進んで瀋陽(奉天)を取りここに都を奠めた。太祖死してその子太宗繼ぐや、國號を清と改め(皇紀二二九六年)ついで朝鮮を伐つて藩屬國とし、更に南下して頻りに明を侵した。その頃、明は神宗以來の惡政のため内亂が起り、その叛賊は遂に北京(北平)に亂入して毅宗は自殺し、明は十七世二百七十七年にして滅亡した(皇紀二二〇四年)。清の統一 清の世祖(太宗の子)は明の滅亡に乗じて叛亂を鎮め、北支那を

鄭成功
〔父は明人、母は我が平戸の人〕

統一して都を北京に遷した。ここに於て、世祖は辮髮令（男子の頭髪を垂らし）を下して、滿洲の風俗に従はしめた。明の諸王は、なほ江南に據つて恢復を圖つたが敗られ、支那本部は悉く清に歸した。この時、只一人、明の遺臣鄭成功は廈門（福建）に據つてゐたが、臺灣に退き、オランダ人を逐うてこれを占領し、一意明の恢復を圖り、我が國にも應援を求めたが、我が幕府は是に應じなかつた。間もなく鄭成功は志を得ずして死し、その孫に至つて清に降つた。

清の隆盛 その後、清は世祖の子聖祖（康熙）、その子世宗、孫高宗（乾隆）に至る百三十年間は清の極盛時代で、國運の隆盛、文化の發達共に支那史上に輝き、所謂康熙、乾隆時代（家綱より家齊時代に至る間）をなした。即ち聖祖の時は内は大いに制度を整へ、亂を平定し、臺灣の鄭氏を降し、外は外蒙古、西藏をも服屬し、またロシアの侵略を防いで（ネルチン條約）大いに國威を發揚した。帝はまた學問を好み、學者を優遇したので、學術大いに振興して多くの學者輩出し、勅選せられた浩漭な書籍も少くない。中に

康熙乾隆時代

も康熙字典の如きは我が國にも傳はり廣く行はれた。次いで高宗の時には清の隆盛は最高潮に達し、内は學術を獎勵して文化發展し、外は天山南北兩路を平定し、進んでビルマ、安南、シヤム等を経略して來貢せしめ、清の版圖は元代に次いで擴張し、隆盛を極めた。また西洋人の東漸と共に西洋の學術も傳來した。

シヤム シヤムは明の末頃、國王ブラチョーソンタムは我が山田長政を用ひて、大いに國勢を振興したが、王の死後内亂が起り、長政も遂に殺された。その後百五十年を経て、國王鄭華（鄭華）に至り、國勢を恢復し、清の高宗の封冊を受けた。これが今のシヤム王家の祖である。

シヤム王家の祖

阿片戦争 英國が印度に勢力を得てから、英國商人は盛に印度の阿片を清國に輸入して莫大の利益を博した。清朝はつとに阿片の大害あるを知り、屢禁令を出したがその效なく、遂に宣宗は林則除（林則徐）を廣東に遣はし、在留英人の所有する阿片二萬箱を沒收してこれを焼き、貿易を禁止せしめた。そこで英國は大いに怒り、貿易保護を名とし

阿片禁止

南京條約

て、廣東、上海等を攻撃し、進んで南京に迫つたので、止むなく使臣を南京に遣して南京條約を結び(1)香港を割き(2)償金を出し(3)五港(上海、厦門、福州、廣東)を開き(4)對等の交を結ぶことを約した。これが清國の西洋諸國と交を結んだ始めて、以後は絶えざる内亂と西洋諸國の壓迫とのために、國力は次第に衰運に傾いた。

長髮賊の亂

長髮賊の亂 清國が阿片戰爭に敗れて國威を損するや、これに乗じてキリスト教徒洪秀全(廣東)は滿洲人排斥を名として、亂を廣西に起し(皇紀二五〇年)、頻に清軍を破つて遂に南京を陥れ、ここに據つて太平天國と號した。世にこれを長髮賊(辨髮しないか)といふ。ここに於て文宗(宣宗の子)は詔を奉じて勤王の兵を募り、曾國藩、李鴻章等は盛に賊軍を敗つたが、容易に平げることが出来なかつた。

英佛との交戦

たまたま清國官吏が廣東港に於て、みだりに英船を検査し、また佛國宣教師を殺したので、英佛聯合軍は廣東を占領し、天津、北平を陥れた。清國は恐れて北京條約(1)償金を出し、(2)キリスト教の公布を許し、(3)九龍地方を與へ、(4)新たに開港する等を結び、

佛領印度支那

やがて清國は英人の助をかりて、長髮賊を破つたので洪秀全は自殺し、南京は陥つて(皇紀二五四年)前後十五年に亘る大亂も漸く平定した。**フランスの侵略** 印度に於て英國に敗れた佛國は、早くより廣東地方に眼を注いで居たが、たまたま越南國が佛人宣教師を虐待したことによつて、佛國(時にナポレオン三世)は遠征軍を出してこれを攻め、遂に交趾支那をとり、カンボチャを保護國とした。しかるに清國は越南國の宗主國であると稱して戦を開いたが、却つて敗れて和を結び(明治十年)、佛領印度支那を建設するに至つた。

第六 王政復古の由來(二)——憂國運動

英露の東進

世界の形勢 寛永の鎖國以來、凡そ百五十年間、我が國人が東海の孤島に蟄居して泰平の夢に耽つてゐた間、世界の形勢は一變して歐洲列國は長足の進歩をなし、且つ競うて東洋に勢力を擴張せんとした。中にもイギリスは印度を經略し、支那と交易し、ロシアはシベリヤ一

帯を占領して我が千島を蠶食し、かくて兩國は次第に東漸して、一は南から、一は北から我が國を窺ひ、その船艦は屢我が近海に出沒して警報頻りに到るやうになつた。

蘭學の勃興 然るに、鎖國以來我が國民は頗る海外の事情に疎くなり、僅かに儒學者が幾分これを知つてゐたに過ぎなかつた。さき新井白石は我が國に漂着したイタリヤ人に就て西洋諸國の形勢を聽き、西洋紀聞を著し、少しく海外の事情を紹介した。その後、吉宗は西洋學術の有益なるを知つて、洋書の禁を弛め、また青木昆陽等は長崎に遣はしてオランダ語を修めしめた。以來、蘭學が漸く勃興し、やがて田沼時代から寛政時代にかけて蘭學は一時に興隆し、前野良澤、杉田玄白、大槻玄澤等の大家が輩出した。これらの人々は大抵醫者であつたが、また天文、數學、地理、化學などの諸科學にも通じ、社會一般の人々に對して大いに新知識を供給し、且つ砲術や兵法も次第に改良されるやうになつて來た。

洋書の解禁

ロシアの東方經略

ロシアの東進 鎖國以來、始めて我が國と外交問題を惹き起したの
はロシアであるが、ロシアはさきにイワン四世(我が信長時代)の後、コサツク兵を先導者としてシベリヤを侵略し、早くもカムチヤツカに達し(我が家光時代)、ペートル大帝の時(我が綱吉清聖祖の時)この半島を收めて領有し、また清國とネルチンスク條約を結び(皇紀二三四九年、清の聖祖の時)、外興安嶺以北の地を取り、これより滿洲の經略に力めると共に、露人は漸く千島列島を侵略して、後、桃園天皇安永七年(將軍家治)國後島に來た。この時、女傑カザリン二世ロシアに君臨し、頻りに我が北邊を探檢し、またイルクツクに日本語學校を設立し、我が漂流民をして日本語を教へしめ、以て侵略の機會を窺つてゐた。

林子平の海防論 かくて、西洋の形勢が次第に明かにされ、海外の形勢に注意する者も出て、且つ北邊の警報が頻りに到着したが、上下泰平の夢なほ醒めなかつた。中にも、志士林子平は書(三國通覽海國兵談)を著して大いに海防の急務を説いたが、こは當時に於ては破天荒な新説

林子平の卓見

ラツクスマンの
來航
(約一四〇年前)

北邊の警備

函館奉行

であつたので、さすがの老中松平定信も人心を惑はす者としてこれを罰した。時に光格天皇寛政四年(皇紀二四〇二年)である。然るに、子平の先見の如く、その年の秋ロシアの使節ラツクスマンはカザリン二世の命を受け、我が漂流民を伴つて根室に来て通商を請うたが、幕府は我が國法を説き示してこれを許さなかつた。寛永の鎖國以來、外國が公然交際を求めたのはこれが始めてである。

未航に刺戟せし者あり

海防論の勃興 ラツクスマンの來航に刺戟されて、有志の間に海防論が漸く擡頭し、幕府(家將軍)もまた海防の必要を悟つて、老中松平定信をして關東地方の沿岸を巡察せしめ、また近藤守重等をして蝦夷地(今の北海道)を巡視せしめ、高田屋嘉兵衛に命じて擇捉島に航路を開き、漁場を設けしめ、伊能忠敬(ただか)をして蝦夷及びその他の地方を測量せしめて地圖を作らしめ、松前氏より東蝦夷地を收め、函館奉行を置いてこれを治めしめ、更に南部津輕の兩藩に蝦夷地の警備を命じた。

露人の來寇 ラツクスマン來航の後十二年、即ち光格天皇文化元年、

露人レザノフの
來朝

間宮林藏の探檢

英艦の亂暴

露國使節レザノフはその主アレクサンドル一世の命を受け、我が漂流民を送つて長崎に來り、再び通商を請うて拒絶されるや、大いに憤り、これよりカムチャツカ在留の露人は屢、蝦夷地に來寇するに至つた。ここに於て、幕府(家將軍)は蝦夷地を收めたが、更に西蝦夷地全部を直轄とし、函館奉行を松前奉行と改め、且つ堀田正敦(若年)等をして蝦夷地を巡視せしめ、ついで仙臺會津の兩藩にも蝦夷地の警備を命じた。この頃、間宮林藏は、幕府の命を受けて樺太を探檢し、且つ今の露領沿海州地方をも踏査して歸つた。

攘夷論の勃興 露人が北邊に寇したについて、南邊に英人が現れた。當時、歐洲はナポレオンの雄飛時代で、英佛兩國は相戦つてゐたが、英艦はナポレオンの膝下にあるオランダの船艦を捕へんとして、屢、我が近海に出没し、文化五年、その一隻は突然長崎港に亂入し、我が國禁を無視してオランダ人を拘禁し、亂暴を極めて去り、その後も英船は屢、我が海岸に近づき、中には上陸して掠奪を行ふ者もあつた。ここ

外國船撃攘令

に於て、我が國民は露英人の暴狀を憤り、中には海防論に止らず、進んで攘夷論を唱導する者が出た。幕府もまた沿岸の諸侯をして文政八年(皇紀二四八五年)、外國船撃攘うちばらの令を發して、我が海岸に近づいた外國船は悉く撃ちはらしめ、以て鎖國政策の勵行を謀つた。

渡邊華山・高野長英の處罰

開港論の擡頭　されど、こは世界の大勢に背いた拙策であるから、蘭學者等はこれを憂へ、特に渡邊華山・高野長英等は各書(蘭語訳撰)を著はしてその不可なるを説いたが、我が國民はなほ醒めず、幕府(家齊)もかれ等を處罰した。しかし、後に清國に於ける阿片戦争の噂を聞きなどして、稍、悟る所があり、仁孝天皇天保十三年(將軍家慶)撃攘の令を緩和した。その後二年、オランダ王ウイリヤム二世は特に使節を遣はし、世界の大勢を説いて開港を勸告したが、幕府は祖宗の遺法を變ずる能はずとしてこれには應じなかつた。かくて、我が國民が將に長夜の眠から醒めんとする際、偶、米國船艦が突如として來朝し、ここに新日本建設の幕が切つて落された。

オランダ王の勸告

普通學科 地理

第一 我が國の地位

我が國はアジヤ大陸の東部に位して、太平洋の中に、東北から西南へ約五千キロメートルに亘り、大弓の如く連つてゐる日本列島と、アジヤ大陸の肢脚部に位せる朝鮮半島から成つてゐる。總面積六十七萬五千平方キロメートル、總人口凡そ九千萬を有し、本國の面積、人口に於ては、ロシア、中華民國、アメリカ合衆國等に遙に劣るが、フランス、ドイツ、イタリヤ、イギリス等よりは稍、大である。住民の基幹をなす大和民族は約六千萬で、その大部分は本州、四國、九州、北海道の本土に住して、その文化は最も進み、新領土の臺灣、樺太、朝鮮の文化も近來は進歩の著しいものがある。

總説

我が國の大部分は温帯に位し海洋に圍まれてゐるから、氣候は温和で雨量にも富み動植物はよく繁殖し、住民の活動に適してゐる。國內は山脈が多いが、山脈の間、河口、海岸に開けた盆地、平野は、地味が肥沃で農産物が多く、山地は林産物を出し、又有用な鑛産も少くない。河川は地形上急流なものが多く、灌漑、水運の便があり、水力發電に盛んに利用せられてゐる。寒暖海流の影響を受けて、水産物の産額は多い。石炭の産出が豊富であり、水力電氣の利用が盛であり、人口が稠密で勞力の供給が多いため、各種の工業が近時著しく發達して、自國産の原料品を用ふのみならず、海外から輸入した原料品を加工し、その輸出額は年と共に増加して、世界の各地に及ばんとしてゐる。

我が國は西にアジア大陸、南に南洋諸島、大洋洲、東に太平洋を隔てて南北アメリカ大陸に相對し、世界交通上の要路を占めてゐる。加ふるに海岸線は長くて良港に乏しからず、陸上の交通の發達と共に水陸の連絡も至便になり、船舶の數も多いから、世界屈指の海運國と

伍し、我が國の交通貿易は、國勢の伸張、産業の進歩と相待つて大いに發達し、輸出入の年總額は著しく増加した。

かく我が國は地理的に天然の恩恵に浴してゐる。この國土に據つて、進取の氣象に富み、勤勉なる住民が各自生業に勵精するに於ては、我が國力發展の將來は益、有望であらう。

第二 我が國の産業

農業

農業

我が國は古來瑞穂國と稱せられ、農業を以て立國の本として來たので、今も尙國民の多數はこの業務に従事し、總戸數の四割六分(昭和七年末)を占めてゐる。然しながらその耕地面積は比較的狭く、約五百九十四萬餘ヘクタール(昭和七年末)である。農業者一人當りの耕地は約四十二アールで、諸外國の少くとも一ヘクタール以上であるのに比べると、雲泥の差がある。こゝに農業國日本の大きな悩みが

米

ある譯であるが、この惱みは耕地の集約的利用と農法の改良と副業の奨励とによつて、少くともその一部分を軽減することが出来るであらう。友邦滿洲國への移住はこの意味に於て頗る重要である。農産物は年額十四億一千七百萬圓(昭和六年)に達し、その主なるものは米・大麥・稗麥・小麥・大豆・茶葉・煙草等である。

米は國內の到る處に産出し、國民の常食として缺くことの出来ないもので、その年産額は九千九百六十萬ヘクトリツトル(昭和六年)で、農産物總額の六割強に當つてゐる。主なる産地は新潟・福岡・兵庫・千葉・茨城・山形・愛知・秋田の諸地方であるが、内地の産出のみでは到底需要を充すことは出来ないので、不足分は新領土及び外國からその供給を仰いでゐる。

麥

大麥は主として表日本に産出し、その年産額は一千三百六十六萬ヘクトリツトル(昭和六年)に及び、主なる産地は茨城・埼玉・千葉・栃木・宮城・群馬の諸縣である。稗麥は主として熊本・愛媛・香川・廣島・兵庫・長崎

大豆

等の西日本に産出し、年産額一千一百八十二萬ヘクトリツトル(昭和六年)、小麥は主として福岡・茨城・岡山・兵庫・埼玉・栃木の諸地方に産出し、年産額一千一百七十二萬ヘクトリツトル(昭和六年)に及んでゐる。近時一般に米食が行はれるやうになつたので、大麥及び稗麥の産額は年々減少する傾がある。

大豆は主として北海道・岩手・茨城・鹿兒島・熊本の諸地方に産出するが、内地の需要は年々その倍額以上に達するので、不足分は殆んどその全部を滿洲國から供給を受けてゐる。

茶は静岡・岡三・重京・都鹿兒島・奈良・埼玉等、比較的溫暖の地方に産出し、



茶 摘

茶

煙草

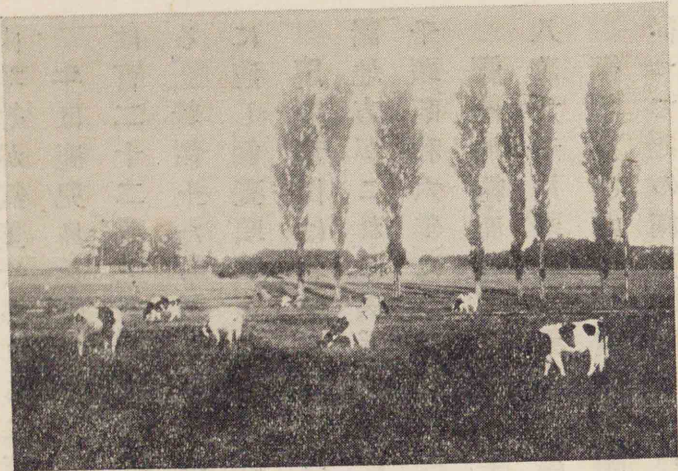
年産額三千八百三十萬キログラム(昭和六年)に達する。この外臺灣には烏龍茶を産出し、年産額一千萬キログラムを數へられてゐる。葉煙草は栃木・茨城・鹿兒島・福島・徳島・廣島を主産地とし、年産額四千三十七萬圓(昭和六年)に及んでゐるが、尙國內の需要を充すに足りな

い有様である。右の外、粟・稗・黍・玉蜀黍・馬鈴薯・甘藷等の農産物があるけれども、その産額が僅少で數へるに足りない。たゞ、馬鈴薯及び甘藷は副食物として相當重要なものであるのみならず、調理法の如何によつてはこれを主食物の代用とすることが出来るから、米・麥等の主食物の兎角不足勝ちな我が國にあつては、これらの産額の増加を研究すべき必要が極めて大である。

養蠶及び養禽

養蠶及び養禽は一般に農家の副業として營まれてゐるが、近頃はこれを專業とする者も少からず、地方の農會其他農業助成機關の活動と相俟つて、その産額も著しく増加するやうになつた。中にも

牧畜業



場 牧 放

養蠶業は最も重要であつて、その製品たる生絲は我が國輸出品の首位を占めてゐる。養蠶に従事する戸數は二百十一萬九千戸に及び、繭の年産額は三億六千四百萬キログラム(昭和六年)を超えてゐる。繭の主産地は長野・群馬・愛知・埼玉・岐阜・山梨・茨城・福島・三重・愛媛・熊本の諸縣で、何れも一千萬キログラム以上を産し、我が國總産額の五割五分に達する。

牧畜業

我が國の産業の中で牧畜は振はな

牛 馬 豚 羊

ら近來では食用・勞役用・軍用等に供する必要から、次第に牛・馬・豚・緬羊・山羊等が飼養せられるに至つた。

牛は鹿兒島・兵庫・廣島・岡山・大分・長崎の諸縣に飼養せられ、その戸數は百二十二萬三千戸、頭數は百五十一萬二千頭(昭和六年)に及んでゐる。新領土たる朝鮮はその風土の關係から、内地よりも遙かに牧牛に適し、飼養頭數も二百萬頭を數へられる。

馬の産出は北海道がその首位を占め、岩手・福島・鹿兒島・熊本・秋田の諸地方がこれに次ぎ、飼養戸數は百十萬八千戸、頭數は百四十七萬七千頭(昭和六年)に達する。

豚は沖繩・鹿兒島・茨城・千葉・静岡・神奈川の諸縣に産し、飼養戸數四十八萬六千戸、頭數は九十四萬七千頭(昭和六年)である。

緬羊及び山羊は氣候の關係上、我が國ではその飼育に適しない。従つてその飼養頭數も極めて少く、緬羊は二萬四千頭、山羊は二十一萬八千頭(昭和六年)に過ぎないといふ有様である。

水産業

水産業

我が國は四面海を以て圍まれ、南は熱帯から北亞は寒帯近くに及ぶ好位置を占めてゐるばかりでなく、寒流及び暖流が海岸近くを流れてゐる關係上、水産物の豊富なことは他にその比を見ない。我が國が世界の一大漁業國として認められてゐる所以はこゝにあるのであつて、水産物の總額は年二億二千萬圓(昭和六年)を超えるといふ盛況を呈してゐる。けれども水産業に従事する者の數は餘り多くなく、百四十九萬人に達しない有様であるから、人口の過剩に苦しんでゐる我が國民は將來この方面の産業に



魚 大 の 鱈

相當の注意を向ける必要がある。

漁獲物の主なるものは鱈・鯨・鯛・鰯・鮪・鯖・秋刀魚・鱈・鮭・鯨等、水産製造物の主なるものは鰹節・食鹽・海苔・鰯・搾粕・乾鰹魚油等である。

沿岸漁獲物は北海道・長崎・静岡・三重・山口・愛知・神奈川・高知・兵庫・千葉等の諸地方に多く、内地沖合遠洋漁業は千葉・北海道・長崎・山口・宮城の諸地方に發達してゐる。また水産養殖業は東京・愛知・静岡・三重・千葉・廣島の諸地方に、水産製造業は北海道・静岡・東京・長崎・宮城・千葉・岩手・青森・三重の諸地方に行はれてゐる。

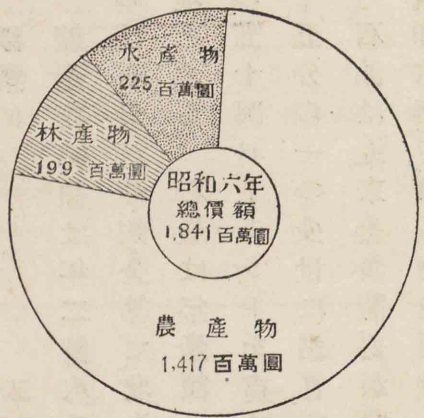
我が國の漁業は一般に小規模のものが多く、沿岸漁業を主としてゐるから、その漁獲物は環境に恵まれてゐる割合には少い。今後益々遠洋漁業を發達させて國家の富強を圖るのは我々の責務である。

林業

林業

我が國は到る處に山嶽や高原があり、然も氣候溫暖、雨量豊富であるから、森林はよく茂り、建築材料・鐵道枕木・マツチ原料・薪炭材料・工業

用原料等を供給してゐる。森林面積は二千萬ヘクタール、原野面積は三百萬ヘクタールで、即ち林野面積は總面積の半を超え、その割合の大なることに於て我が國に張合ふものは瑞典あるのみである。



我が國の林業にも一大變化を來すことゝなるであらう。

林業の盛に行はれてゐる地方は樺太・臺灣・北海道・長野・秋田等の諸縣で、建築材としては杉・松・檜・樺等があり、鐵道枕木としては栗があり、

鑛業

薪炭材料としては櫟・檜等がある。採伐價額は年一億九百萬圓(昭和六年)を超え、木炭・葎類・筍・柴・草・果實・樹皮等の林野産物の價額は年九千萬圓(昭和六年)に垂んとしてゐる。

鑛業

鑛産物總額は年二億八千三百萬圓(昭和六年)に及び、その主なるものは石炭・石油・銅・金等で、北海道・新潟・山口・秋田・長崎等の諸地方を主産地とする。石炭は年産額一億五千萬圓(昭和六年)を超え、鑛産物總額の五十四パーセントを占めるほどであるが、これを米國に比すれば十五分の一の少量に過ぎない。

石油は近來その需要が俄かに増加したが、年産額は四千九百萬圓(昭和六年)で、鑛産物總額の十七パーセントを占めてゐる。

我が國は米國・智利・白領コンゴ等に次ぐ産銅國であるが、その産額は三千三百萬圓(昭和六年)に過ぎない。尙昭和六年度に於ける金の産出は一千八百萬圓であつたが、最近金の價格の騰貴に伴つて産

工業

巧なものが無數にあるが、明治維新以來、外國の機械工業が輸入せら

種別	昭和 2		" 3		" 4		" 5	
	千越	百萬圓	千越	百萬圓	千越	百萬圓	千越	百萬圓
鐵	937.5	9.1	1,617.0	16.2	1,944.8	19.3	1,973.6	19.0
鐵塊	478.0	22.0	572.9	26.1	657.2	29.1	408.6	16.5
鐵鋼材	88.1	6.0	90.0	7.1	166.3	12.6	69.8	4.5
鐵鋼材計	802.1	98.8	805.1	102.8	774.8	99.6	429.3	55.3
鐵鋼材計	228.2	8.4	367.2	13.4	490.5	18.3	488.9	17.3
鐵鋼材計		144.3		165.6		179.0		112.6

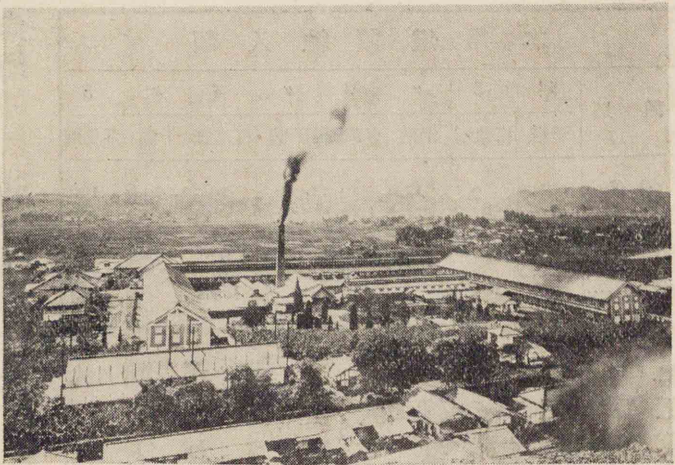
金熱が高まつてゐるから、將來多少の増産は期待されるであらう。尙鐵鑛は我が國には釜石・北海道・俱知安等に僅の産出がある外は殆んど恵まれてゐない。砂鐵ならば東北地方を始めとして國內の各地に相當多量に産出するが、これを製鐵原料に利用することは殆んど困難とされてゐる。従つて鐵鑛の供給は主として支那の長江沿岸及び馬來半島に受けてゐる有様である。これらの鐵鑛より生産せられる鉄鐵は年額二千六百萬圓、鋼材は一億四百萬圓(昭和六年)に達してゐる。

工業

我が國民は古來手先の技に優れ、祖先の殘した工藝品の中には、歐米人も驚嘆するやうな精

工業生産物

れ、この方面も過去六十年の間に著しい發達を遂げた。



製絲工場

工業生産物は年額五十七億圓(昭和五年)に達し、生絲・綿織物・毛織物・木製品・晒及び染物・メリヤス製品・陶磁器・植物油・石材・皮革及びその製品・漆器・瓦及び土管・壘表・花苳・麻織物・帽子・竹製品・澱粉・刷毛・麥稈・經木・眞田・籐及び柳製品等がその主なるものである。その中纖維工業は我が工業の王座を占めるものであつて、その中最も主要なものは、内地生産品を原料とする生絲及び絹織物と、外國生産品を原料とする綿絲及び綿織物とである。

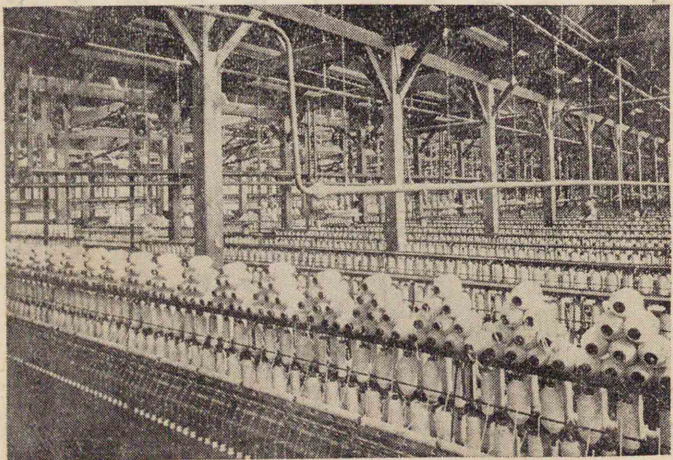
生絲はその産額遠く他國を抜き、我が輸出品總額の三分の一に達

工業地帯

するといふ盛況であり、綿絲布も亦これに次いで輸出品の花形となつてゐる。その他毛織物・麻織物等の纖維工業製産品も決して侮ることの出来ないものがある。

尙我が國の重要工業として擧げられるものは、製糖及び醸造等の食料品工業、セメント及び人造絹絲等の化學工業、機械及び航空造船等の機械工業、製鐵及び製銅等の金屬工業等であるが、近時電氣工業も亦長足の發達を遂げ、有望な將來を期待されてゐる。

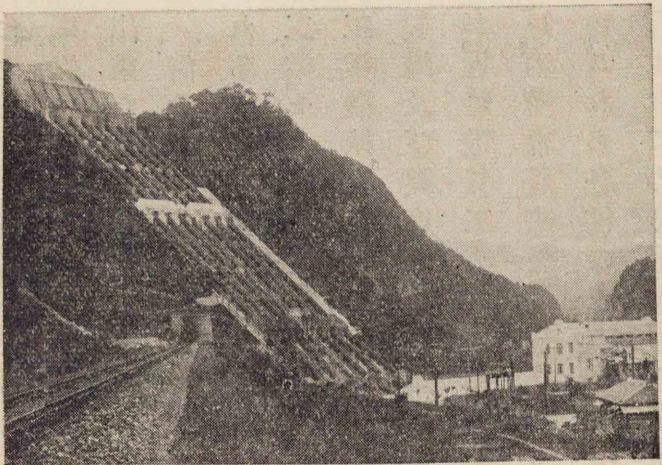
これら各種の工業は殆んど全國に行はれてゐるが、就中最も繁盛に行はれてゐるのは京濱地方・阪神地方・北九州地方で一般に我が國の三大



鐘淵紡績工場内

我が國の工業の
將來

工業地帯と稱せられるのがこれである。



桂川水力発電所

けれども我が國の工業はその原料に乏しく、生絲の原料たる繭を除けば、棉花、羊毛、鐵等の如き重要工業の原料は悉くその供給を外國に仰がなければならぬ有様である。一方これを工業製品とするために必要な動力の方面から見れば、石炭の埋藏量は次第に減少する傾きがあり、近來俄かに重要となつて來たところの石油に至つては、内地の産額僅かに需要量の二割五分にも達しない有様である。この間にあつて獨り氣を吐くものは、地勢上無制限にその供給を仰ぎ得られる水力電氣であつて、最近に於ては

商業

工業動力の五割四分を供給する大勢力を持つに至つた。更にこれを機械を繰縦する勞力の側から見れば、われわれは精勤熟練にして賃銀の低廉な労働者を持つてゐる。こゝに於て原料の乏しいことは必ずしも悲觀に値しないことゝなつて來る。我が國の工業は商業の發達と手を握つて安價なる外國原料を求め、これに工業的加工をなし、再びこれを外國に送ることによつて、愈々將來の發展を期することが出来るのである。

商業

我が國の商業はその出發に於て歐米諸國よりも遙かに遅れ、僅かに地方の小都邑に行はれてゐたのに過ぎなかつたけれども、明治維新以後國外にその門戸を開いて以來、工業の進歩と相俟つて目覺ましい進歩を爲した。近年、都市の人口増加の割合が農村に比して著しく高くなつて來たのは、商工業が年と共に繁盛に赴くことを語つてゐるのである。

賣買業

商業の中で最も多数の従業者を持つてゐるものは小賣業と卸賣業とであるが、我が國には殊に小規模の小賣業者が多く、その大多數は舊來の經營法を守り、小地域の中に群小の小賣業が割據して互に競争してゐる有様であるから、最近、新式の經營法によるデパート・チエイン等に壓迫されて、經營困難を來すものが次第にその數を増して來たことは、小賣業に従事する者の反省しなければならぬところである。

公設小賣市場は市町村等の公共團體が半永久的の建築物を設け、これを多數の小賣業者に貸與へて日用品を廉賣せしめるものであるが、かやうな施設は時代に適したものととして一般から歓迎され、最近に於ては六大都市の市場だけでも百十九箇所(昭和六年)に及んでゐる。

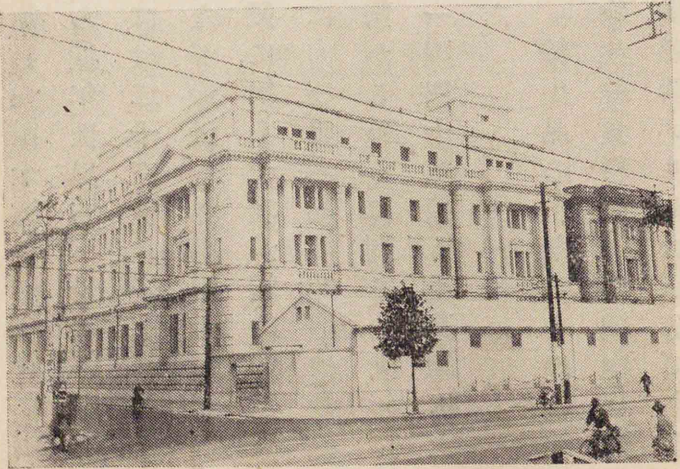
金融業

金融機關としては中央に日本銀行があつて内國金融の總元締をなしてゐる外、貿易業に従事する者のために横濱正金銀行、農工業に

貿易業

従事する者のために日本勸業銀行、農工銀行、日本興業銀行、北海道拓殖銀行、殖民地の産業に従事する者のために臺灣銀行、朝鮮銀行等の特殊銀行がある。一方國內商業の金融機關としては九百十三行(昭和五年)の普通銀行がある。近時小銀行は次第に大銀行に併合せられて年々銀行數が減少する傾があるが、これは銀行の信用上喜ばしいことである。この外金融機關として見逃すことの出来ないものに信託會社がある。

我が國の貿易は各種産業の發達と共に年を逐うて隆盛に赴いて來た。即ち明治元年には貿易總額僅かに二千六百萬圓に過ぎなかつたも



日本銀行

主要貿易品

種別	昭和7	8	9
小麥粉	20,539	34,955	28,452
精糖	7,797	14,909	13,532
罐詰食物	22,774	46,984	50,304
綿織糸	21,546	15,712	23,485
生織糸	382,366	30,901	286,794
綿織物	288,712	383,215	492,351
人絹織物	60,540	77,382	113,484
絹織物	50,288	63,545	77,488
メリヤス製品	26,935	42,047	47,618
陶磁器	22,937	35,634	41,877
鐵製品	14,193	26,897	35,277
機械類	10,943	25,857	57,777
木材	11,329	18,638	23,915
玩具	15,119	26,375	30,386
其他	453,974	657,995	849,185
計	1,409,992	1,881,046	2,171,925

のが明治二十九年には二億圓、明治三十八年には八億一千萬圓、大正三年には十三億六千萬圓と次第に増加し、大正十四年には實に四十九億圓を數へるに至つた。然しながら近年、世界的不景氣の影響を受けて一時減少の傾があり、昭和六年には二十三億八千萬圓となつたが、最近世界列強の貿易の不振に拘らず、我が國は斷然好況に向ひ、日本品の進出は世界を驚かしむるに到り、同九年には一躍四十四億五千萬圓に上つた。

輸出品の主なるものは綿織物、生絲、食料品、人絹織物、絹織物、陶磁器、メリヤス、紙等であるが、就中綿織物の如きはその首位

主なる相手國

種別	昭和7	8	9
米	12,165	11,521	661
小麥	49,572	44,384	40,749
豆類	42,070	50,345	51,473
砂糖	3,332	12,794	9,697
油及重油	54,887	68,347	82,483
生油	15,989	29,685	57,338
硫酸	4,035	9,421	13,807
棉花	447,401	604,847	731,425
羊毛	87,559	164,192	186,455
織糸	5,113	3,021	1,708
織物	10,488	7,213	5,199
石炭	27,358	36,657	47,193
鐵	65,075	136,641	171,563
自動車同部分品	14,821	13,871	32,302
機械類	60,573	72,658	98,022
木材	35,029	40,584	40,183
油粕	34,599	41,181	42,052
其他	461,394	569,858	670,239
計	1,431,460	1,917,220	2,282,531

の部分品、原油、木材等であるが、中にも棉花はその首位を占め、昭和九年度に於ては輸入總額の三割二分を占めてゐる。

貿易の相手國は、輸出にあつては北米合衆國が最も多く、英領印度及び關東州、蘭領印度、滿洲國、支那等がこれに次いでゐる。輸入も亦